大正七年三月八日第三種郵便物認可
大正七年三月六日發行（毎月一回一日發行）

求道

第拾四卷
第壹號

三月號

■はしがき
■臣道と民本
■一念徹底の信仰
■歸命の一念「蓮如上人の後生助け給への意義」
■信仰書簡
■人生眞實の淵源「利他圓滿の大行」

はしがき

○久しく『求道』を休刊して實に申譯がありませぬ、何の理由もない、我等關係者の怠慢の罪といふより外はありませぬ、併絶對に廢刊するつもりではなかつたゆへ、御斷りもせずに居りましたが、嚴しき御叱りも蒙らずに御待ち下された御好意は何とも申樣がありませぬ。

○加之諸方面より『求道』は我等の生命である、精神の資糧である。是非刊行せよとの御親切なる御催促に默しがたく、相變らず舊面目を以て久しぶりに見ゆることになりました、實は多少清新なる筆致を以て書いて見たいと思ひましたが、從來講話を筆記したものが、此頃漸く兩三篇を書き取りて示しましたゆへ、此端がきを加へて直に印刷に附することに致しました、要するに嚴重なる雜誌の體裁を具へたものではありませぬ、求道會館が建設されて中央首都の求道者は直接講話を御聽き下さる便宜が出來たに引かへ、却て地方の方が其講話を御聽き下さることが出來ぬゆへ、之を印刷して讀んでいたゞく樣にしたといふまでの事であります。

○併此機會に於て偶感を披瀝して聞いていたゞきたいと思ひます、今更改めて申すまでもないことながら、親鸞聖人の信仰は如何にも徹底的のものであつて、人生百般の事此信仰の徹底に待たずんば解決が出來ないのであります、而して今日一般聖人の信仰を直に獲得するものが少くして、聖人の敎化を一種の型の如く傳統的に繰返すものが多い、是最も遺憾に堪へぬことである、而して我等は聖人の信仰の生命を實驗して、人生百般の事を解決せんと試みるものである、夫にも拘らず、誌上に其眞面目を發揮することが甚だ困難である、是久しき間熟考したる問題である、されど結局各人が信仰を獲得するより外に道はない、冀くは同朋諸氏は本誌を以て傳統的に敎義を反覆するものとなさずして、信仰を實驗して人生百般の問題を徹底的に解決せられんことを、是本誌の至願である。

○信仰は生死流轉の迷妄を斷絶して、永劫涅槃の靈境を開覺するが根本義たるは言ふを待たぬ、併此信仰を獲得せば此人生に於て其光輝を放たさしむることは必然の結果である、然らば數年來の歐洲の動亂否世界動亂の問題も最後の平和の源泉は信仰に待たなければならぬ次第である、而して我等の所信を直言せば、歐米の宗敎は或は殘害殺戮迭相呑噬の修羅場を徹底的に融和せしむるの根本精神が缺けて居る、此點に於ては佛敎は正に其根本精神を發揚すべき秋であると信ずるのである、親鸞聖人の信仰は實に此際に於て最も容易に其間融無碍の力を人生に實現するものである、是信仰實驗の人が冷淡自知するところにして、之を自證自得して以て世界に發揚すべきである、かく言へばとて此鬪諍堅固の澆季末世をして、淸淨の安樂世界たらしむるといふ空想を說くのではない、寧ろ末世相應の要法、濁惡世界の光明として、たしかに、流轉輪廻の根本を勦絶し、干戈動亂の鬪爭を平和ならしむる源泉であるといふのである。

○同時に政治に、經濟に、且文藝に、現代は種々の思想界の混亂を來してある、所謂軍國主義民本主義の潮流の如きは世界を兩分せんとする二大思想である、併此兩者は我等の信ずるところによれば徹底したるものでない、上下秩序嚴正にして且上和下睦の平和なる政治の實現出來ることを信ずるのである、聖德太子十七憲法の如き實に其精神の躍如たるものである、是亦畢竟信仰の徹底より來ること毫も疑ふ餘地はない、勞働問題にせよ、家庭問題にせよ、皆必ず信仰によりて其解決の根本的基礎をなすものであると信ずるのである、かく言へばとて我等は各種の專門的智識を熟知するもの

てはないが、其根本の動力が信仰であるといふことを斷言するものである、而も其信仰たるや頑固の樣である、而して親鸞聖人の信仰は一文不通のものも、宏才明達の士も齊しく此境界に悟入し得らるべきものであるは毫も疑を容れぬ。

○此等の所感は講壇に誌上に切言せざるを得ぬものである、唯思ふ樣に云ひ顯はすことの出來ぬを遺憾に思ふのである、併こは言ふべき事柄ではない、先づ如來の慈悲の下に自身が自覺自得すべきものである、我等は寧ろ其自覺自得の至難なることを慚愧し、言ふは安くして行ふの不可能なることを懺悔するの外はない、最後に再言したいことは、本誌は講話の儘を筆にしたまでのことで、寧ろ發刊し安いことを主としたことであります、一言はしがきすること此の如くであります。

臣道と民本

一

今日は二十二日、聖德太子の命日である。この日に於て太子の十七憲法の眞精神をお話致し度い。

斯く考えて居た處に恰も今早朝親友萩野仲三郎氏見えて、今日は太子が佛法興隆の道場たる大和法隆寺の管長佐伯上人が來られることになつてある。丁度命日でもあるから君も呼びに來たとて……これは萩野君の家にも太子の勝鬘經講說の木像が安置されてある。これは一昨年東大寺大佛開眼供養の時、君は政府より參られて、その時この木像を奈良の町にて發見して來られた。町の道具屋に出てあつて、主人が『俗人のやうにて袈裟を掛け、神ともつかず、佛ともつかず、一體何樣だらう』かくいふて居るのを購ひ歸りて安置して居られる、卽ち勝鬘經講說のお姿である。卽ちこの日に於て佐伯管長が見え、私もお伺ひして來た。今日はこういふ日柄であるに因み、十七憲法の精神をお話し致度いと考える次第である。

二

初に自分の申さんとする處を申述ぶるに、十七憲法中に臣道なる文字が再三使用はれてある。臣道はケライの道なる意味である。この意味は憲法中至る處に言はれてあるも、今は、かく言はれたる太子の精神に就き申陳べんとするにある故、少しく根本に上りてお話致し度い。憲法の第三條に、

詔を承けては必ず謹め。君は則ち之を天とし、臣は則ち之を地とす。天覆ひ地載す。四時順行して、萬氣通ずることを得。地天を覆はんと欲すれば、則ち壞を致す耳。是を以て君言ば臣承け、上行へば下效ふ。故に詔を承けては必ず愼め。愼まざれば自ら敗る。

といふのがある。文字の如く君則臣則の別明にして、何の異なきが如くであるけれども、この十七憲法としては、この三條に至る前に一、二の二條がありて、一二の二條を經てこの三條に移る、そこに意味が存するのである。この一二條を經て三條に至るそこの關係が、人生方面として信仰味を話すに非常によい。故に私は地方に參つた時は必ずこの憲法に就きてお話する。今も話す以上はそこまで申述べ度いと考える次第である。

三

併し先づ臣道なる文字に就き、言はんとする趣意より申すに、普通に臣道といふ時は、誰しも先づ君に忠義をせんならぬの意味に取る。普通に臣道といふ時は、一にも二にも上に仕へ奉るが臣道故、絕對に君の言のまに〳〵服從するが忠なり、臣道なりと考える。處が後になりてこの憲法に於ける臣道なる文字の使ひ具合を見るに、なか〳〵然うでないことを發見する。先づ第五條には、

餐を絕ち欲を棄て、明に訴訟を辨へよ。其れ百姓の訟は、一日に千事あり。一日尙に爾り、況や累歲をや。頃訟を治る者は、利を得るを常と爲す。賄を見ては、讞を聽す。便ち財有るものゝ訟は、石を水に投るが如く、乏しき者の訴は、水を石に投つに似たり。是を以て貧しき民は則ち由る所を知らず。臣の道も亦焉に於て闕ぬ。

斯くの如く使はれてあるのである。この意味は餐は炊

餐の餐にとりてよい。その時は御馳走を斥けよの意味になる。餐を絶ち欲を棄て、明に民の訴訟を裁断せよ。それ百姓の訟は一日に千事ある、況んや累歳に於てをや。爾るをそれを裁断せんならぬ者が、此頃利益主義に墮ちて、賄が利くといふは怪しからぬことである。それ故財有る者の訴は、石を水中に投げ打つが如く、如何な無理も通り、乏しき者の訴へは、水を石に投げ打つが如くに、毫末も通らぬ。この故に便りなき臣民は由る所を知らず。臣道も茲に於てか闕けぬ。と斯くの如くに使はれてあるのである。

即ち臣道としては一にも二にも上の命を奉じ、總て絶對に仰せのまに〳〵服従するが臣道とする時は了解し易きも、今茲の意味よりする時は、陛下の臣民をして一人たりともその所を得せしめざる時は、それが臣道に背馳することゝある。陛下の思召を下萬民に能く行き屆かせぬことが、臣道に非らざることゝ、斯く言はれてある。

猶ほ今一ヶ條を舉くれば、第十五條には

私を背きて公に向ふは、是れ臣の道なり。凡そ人私有れば必ず恨みあり。恨有れば必ず固らず、固らざれば則ち私を以て公を妨ぐ。恨起るときは則ち制に違し法を害す。故に初の章に云く、上下和睦と、其れ亦是の情歟。

と。私欲に趣きて公を棄て、所謂天皇の百姓をして無告に泣かせ置くことが臣道に背くものと、茲に臣道の精神が置かれてある。凡そ人私有れば必ず恨あり。恨みあれば結局私を以て、上の思召を蔽ひ妨ぐることになる。故に心に滯なく、隔てなく、總て公明に向ふが臣の道であると、斯くの如くに言はれてあるのである。

四

こは今少し近頃の政治上の思想にこと向けて話すに、近時政治上に民本主義なる言葉が頻に使用せられてある。民本主義とは如何なることか、西洋などにても種々の説あらん。或は民主々義とやうにとる時は、西洋に於ける一つの政治上の主義となる。爾るに今は斯くの如く、民百姓をして一人たりとも各その所を得せしめ度い。若し一人たりとも野に不平の民あらば、これ至仁の思召を中途にて抑塞せるものにて、臣の道に違背するものと、言はれてあるのである。大體に於て十七憲法は、これで言はれてある。故に今申さんとする處は、近頃いふ民本主義とは意味を異にすれども、眞の意味にて申す時は、眞の臣道は總て君王の思召を下、民百姓に滯りなく徹底せしめ、萬民をして君德に悅服せしむること、これてあると、かく明に示されあるとのことを申し度いのである。

殊に十二條如きには、

國の司國の造、百姓を歛すること勿れ。國に二君靡く、臣に兩主無し。卒土の兆民王を以て主と爲す。任ずる所の官司は、皆是れ王臣なり。何ぞ敢て公と百姓を賦歛せんや。

即ち普天の下卒土の濱、皆な王臣にあらざるは無い、皆な是れ　天皇の直き〳〵の臣である。而るにその間に介在する官吏の輩が私意を以て百姓を賦歛するは王臣たる道に背くと、總て斯く上の　大御心と下人民との間を疏通して、隔て無らしむることが、十七憲法には書かれある。又第六條如きには、

惡を懲め善を勸むるは、古の良典なり。是を以て人の善を匿すこと無く、惡を見ては必ず匡せ。其れ諂詐の者は則ち國家を覆すの利器たり、人民を絶つの鋒劍たり。亦佞媚の者は、上に對して好て下の過を説き、下に逢へば上の失を誹謗す。其れ此の如きの人、皆君に忠無く、民に仁無し。是れ大亂の本也。

苟も人に善あらば匿すこと無く、惡あらば必ず匡せ。結局上に對しては下の過を説き、下に逢ひては上の失を誹議するが如きは大亂の本で、最も臣たるの道に反すと、これで十七憲法の思想は通つてあるのである。殊に忠の言葉を用ゐずして、臣道と言はれた處味ひが深いと思ふ。

五

昔話になるけれども、十數年前物故せられた島田蓉根翁なる方ありて、深く太子を尊崇して、自ら臣道會なるものを作り度いと一代言ふて居られた。それは十七憲法を本として、今いふ臣道の意義を徹底せしめ度いとであつた。何うかこの十七憲法を中心として、政治、實業、教育、文學、宗教、各部面の人が、太子の信仰の下に一つになつて各部面にやつて行く、

この理想を現在に實現し度いと言うて居られたのてあつた。翁は學者であつた故、實際には行はれることが出來なかつたが、その志て書かれた翁自筆の十七憲法、が私の處に遺つてある。第一この會館の敷地が全部翁の居住地であつた。何ういふことであつたか、森川町草分けの時代より茲の地面を借り受け、この地て何かそういふ意味の企てを興し度いとの精神であられたそうであるが、それが私の手に來て、かくは皆さんに茲てお慈悲を聞いて頂けることになつた。こは全く翁がこの地を借りて置いて呉れたればこそであると思うて、この點より言うても私は深く翁に感謝して居る。十七憲法なども、斯く讀ませて貰ふ丈けても、全く翁より授け呉れたるものと思ふて、一言かくは言はせて貰ふた次第てある。

六

それて少し言ひ過ぎになるかも知れぬけれども、私の申し度い意味を、特に青年學生諸君によく聞いて頂き度い。こは信仰問題としては結果より言ふことになるから、眞に聞いて下さるには善く無いかも知れぬが、今日種々なる思想上の問題がある。或は文藝上の思想、學問上の思想、政治上の思想。それらが人生の根本問題を眞に解決するが信仰である、との處より考えて來れば、恐らくこの意味を徹せしむる時は、それらの思想上の有らゆる問題をも根本的に解決することが出來る處がある。處が說く者もそこ迄說き及ぼさず、聞く者も自分の安心する、せぬが主になりて、實際政治上の治亂興廢の上に迄力及ぼす力ある信仰なることは考えて居ぬては無いか、況や言ふ者に至つては、尠いてないか、と斯く私としては思ふて居ることなのである。こは私としても心に思ひながら、餘り口に仕なかつたのてあるが。この點私自身が第一遺憾に思ふて居る次第てある。こは信仰に經驗ある諸君が、自身の徹底の經驗から考えて見られても、そのそれに至られた迄の問題には、種々樣々の樣式あらんが、思想上の根本をなして居たものに至つては、皆な同じてあつたのてある。而してその根本を解決したものが信仰てあれば、この點より考えても斯くならぬければならぬのてながらうか。從つて今言ふ臣道なることも、之て充分解決が出來ると、考えて居

るのてある。

七

今日政治上の人口を開けば、一方に民本主義てあると言ひ、一方には官僚主義てあるといふ。臣道なることも、取りやうによつて官僚主義にも見えるのてあるけれども、そうて無い。然らば所謂民本主義の破壞的思想に近いものかといふに、否な眞に民に安んずる精神にして、上下の秩序明に、天地の區分明に立つ臣道てあると言ふことが言ひ得る。即ち所謂民本主義にしても、官僚主義にしても、それは何れも一方に偏りたる思想てあるが、これは一方には君恩の偉大なることを民心に徹せしめ、民をして各その立場を得せしむる處の精神てある。而してその精神が何處から來るかといふに、信仰から來る。即ちかくの如き精神的立場が信仰より來るとのことを申し度いのが、私が今十七憲法につき申さんとする處の趣旨なのてある。

八

これは第一名前が憲法故、動もすると「斯くせよ〳〵」の律法的の敎えの如くにも聞えるが、太子の言はれた處はなか〳〵そんなことて無い、世に言ふ法律、律法、掟とは我等の遵奉すべき事柄の標準を取り決め、之を集めたものてあるが、今太子の言はれた處は、民をして各據り所あらしめ、中心より君德に悅服して信順することが出來るやう、それを示されたものがこの十七憲法てあるのてある。私は常に言ふことてあるが、十條如きには怨を絕ち、瞋を棄て、人の違えるを怒らざれ。人皆な心有り、心各執るところあり。彼是なるときは、我非なり。我是なるときは彼非なり。我必ずしも聖に非ず、彼必しも愚に非ず、共に是れ凡夫耳。是非の理、誰か能く定む可けん。相共に賢愚なること、環の端無きが如し。是を以て彼人瞋ると雖、還て我が失を恐れよ。我獨り得たりと雖、衆に從て同じく擧へ。

我々腹を立てるは、自分が善くやつて居ると思ふからてあるが、人から見ると、そういふてる此方の方がいかぬ、共にこれ凡夫のみ。茲まて言はれると如何な我慢な我々も恐れ入りましたと頭が下らざるを得ぬ。即ち我々が

信仰上より頭が下り中心より悅服して各據る可き處が知れるやう、それを知らされたがこの憲法なれば、世間でいふ法律とはこの點全然違つて居る。

さらば經文、乃至教理を說きたもの丶如きかといふに、否、唯單に信仰を說きたるもので無い。信仰に徹すれば必然の結果として、嚴肅なる秩序ある人生生活が現はれて來る。と、これを說かれたものがこの憲法である。卽ち信仰が必然の結果として力となつて人生に現はれて來る、その力を說かれたものなれば、この點より見て十七憲法は、實に著しきものと、私は平常考えさせて貰うて居る次第であるのである。

九

そこでその結果に到るべき順序は何うなりて居るか、そこでこの憲法の根本義たる一條二條をお話する必要が出て來る。私は先きにもいふ如く地方に參りた時は必ずこゝをお話する。それは初めから信仰というても人が理解して呉れぬから、先づ之をいふことに致して居る。今もそれを繰返させて貰はふと思ふのである。

第一條には曰く、

和を以て貴しと爲す、忤ふ無きを宗とす。人皆な黨有り、亦達する者少し。是を以て或は君父に順せず、乍に隣里に違ふ。然れども上和し下睦み、事を論ずるに諧ふときは、事理自ら通じて何事か成らざらん。

卽ち人間は互に和ぐを貴しとなし、忤らはぬを宗とする。卽ち平和が何より尊いのであるといふのであるから、一見極めて平易な敎えてある。卽ち何人も和がんとして、只管それに努めて居る。私如きも初は、「飽く迄人と平和に仕度い」、「逆らはぬやうに仕度い」、之れに力を用ゐたのであるが、夫れをするには「自分の勝手を仕ては可かぬ、自分を捨てゝ、人に讓つてゆかなければ可かぬ、自制してゆかなければ可かぬ」と、卽ち私の言葉でいへば、人にまことにしてゆくことゝなる。處が常に言ふ如く、それでいくと何ういふ考が出て來るかといふに、『自分の方よりは之れ程人にまことにし、これ程我慢を捨てゝ居る』と、この考を以て人を見ることになる故、『人はまことに仕て居無い。各自に勝手をやつて居る、强い者勝ちである、强食弱肉

である』と、これが目についてならぬやうになつて來る。卽ち自分が眞地目にすればする程、人が〳〵と、人を惡しく思ふ心が强まつて來る結果になつて仕まふのである。卽ち初めに『人と隔てぬやう、平和にするやう』と、之を綱領にして努力した結果が彌々反對に人と平和に出來ざるやうの結果になりてゆく、これが人生の痛ましき處であるのである。

それ故『人皆な黨有り亦達する者少し云々』――「自分の方がよい〳〵」の、黨派心ばかりになつて、達觀出來て居る者が少い。皆んなが各自に「自分は正しく出來て居る」の立場に據つて居るから、『是を以て君父に順せず』――上の方の仰せても中心より悅服して信順することが出來ず、周圍隣人に向つても善し惡し、不平不足の問題が起つて來る。すると一方に於て是非實行しなければならぬ平和の問題が、一方に於て實行不可能の問題となつて、茲に於て我々如何にして安心するか。こゝで初めて我々自身の問題となつて來るのである。

こは私共初より、斯く〳〵するは罪惡といふ、この罪惡の方は至つて分り易い。これだと我々腹立てゝ居るを罪惡とする時は、立てゝ居ぬ時は罪惡でなくなつて來る。處が今いふ如く我々「自分は腹立てゝ居ぬから、彼の人よりはよく仕て居る」と考えるこれで彌々力みかへつて實際は人と隔て、動きがつかぬことになつて居るのだから、この點最も我々の苦しい處であるのである。

一〇

さて茲へ來るといつも同じ信仰の話になつて來るのであるが、殊に青年の人で眞地目に考えて居る人になると、『自分が正しき道をゆく、善く仕て行く、平和にする』これを理想として進んで居る人が多いのである。併し問題としては、結局それが實際としては、思ふやう出來ないといふそこへ出て來る、茲で言はなくてはならぬのである。最も一人々々の經驗故、中には『本當に善くは出來ないが、成る可く善く仕てゆかなくてはならぬ』斯く考えて安んじて居る人もある。これで安んじてゆけるやうであれば、信仰とか罪惡とか六かしく言ふ要は無い、所謂修養でゆけるのであるけれども、如何せん今いふ如く、善くすれば善くする程自分

は善く仕て居るとの考が強くなつて、その結果却つて人に對して惡しくなる。自分の仕て居ることが絶對によく出來て居ぬとなれば、少し出來て居ても、それでは我々安心はされぬと、こゝになりて來るのである。

一一

話が飛ぶも近時私に近接して居る學生諸君の間に斯ういふ問題が起つた。それは大低の人が自分に惡しき心が起ると、『斯ういふ者をお救ひ下さるのであるから有難い』と、これを以て信仰の如く思ひ做して居るのであるけれども、私『それは然う思ふて居る丈けの自分の思いで無いか。自分の惡しくなつた時、斯ういふ者を〳〵と、勝手に思ひで撫でつけて有難がつて居る丈けのことで、そんなものが本當の信仰で無いてないか』との事を申したのである。これは動もすると、斯くの如き一種の思ひに欺されて信仰であるかの如く思ふて居ることが屢々ある。我々一人の友人を攫まえて『此の君なら信ずる〳〵』と信するはよけれども、それが自分の思ひでそう思ふて居るのであれば、九十九迄信じて居ても、最後に『若しや』の疑ひが一念出て來れば、初めの九十九まで信じたと思ふて居たのが嘘かもしれぬ。すると今まで信じたと思ふて居たのが一邊に皆な碎けて來る。中には『自分はもう薄紙一重の隔てが取れゝば信仰である』といふ人もあるのであるけれども、薄紙一重が可けなければ、全體が皆な可かぬ。これは我々の『信じました、有難く思ひました』といふてる信仰の中には、甚だあぶないのがあることを申したのである。

一二

そこで前に反つて『和を以て貴しと爲し、忤ふ無きを宗と爲す』この人生平和の理想であるが、茲て私としての述懐を申せば、『だから自分は心から人と和いでゆき度い、宗教の爲めにも盡し度い』と、私としては之て努力し力行し、献身的にやり拔いた最後に、『之ほどやつてゝも人が本當に認めて呉れぬ』この不足が一念出て來るなり、『今迄自分は身を捨てゝやつて居ると思ふて居たが、これではちつとも捨てられて居ぬ。人が認めて呉れぬのが不平であるやうては、結局今迄爲し來つた事、人に譽められ度い爲めやつて居たに過ぎぬてないか』と、私としては茲て今迄の事殘らず宗教家の美名を欲し、自から精神家を標榜してやつて居つた複雜な虚榮心であつたと、これで私としては動かれなくなつて仕まつたのであつた。そこで斯うまで行き詰まつたのが、茲て何處て救はれるか、言はなくてはならぬは茲である。

處て舊來の同行信者にすると、茲て『惡しくてもよいのだ』と、こゝが甚だ輕い聞きやうになつてある。今いふ如く茲は『こんなに惡しくては殘念である』『斯ういふ恐ろしい心がありては人に捨てられて仕まふ』と、惡しくてはよく無いから苦しん居る處故、『惡しくてもよいのだ』と何程いはれても何にもならぬ。これはうつかりすると同行信者の人は茲て斯ういふ聞きやうになつて居はせぬか。又中には『そふいふ罪深い者故お救ひぢや』と、これて茲を氣樂に通つて仕まつて居る人がある。『爾らばいふ處のお救ひとは何事ぢや。』『極樂に參らして貰ふことぢや。』『うん爾らば自分如き惡しき者は、寧ろ地獄へ行つた方がよいてないか』となつて、何を言つて居るのか、茲でお助けの意味分らずに言つて居る場合が多いのである。

一三

すると茲て私共の心に眞に願はしい事は、この時私の心に思うた愚癡の有る丈けを言ふ時は、『自分としても斯程迄正しく行はうと考へて、これ迄努力して、結局それが名譽心の外にないことになつて仕まつたのであつた。如何にも我ながら呆れ果てたる我が根性であるが、斯くなりては最早や最後に願はしいことは、哀はれ世の中に自分のこのせん術ない胸中を眞に見て呉るゝ人ありて、これ程努力してもその如何してもいかなんだのが可哀相てある。そこを自分は見てやつたのてあれば、その爲め汝は如何に我を隔つるとも、我は何處迄もその汝を隔てぬぞ。成る程汝の云ふ如く隔ての取れゞばよいことは分つて居るも、如何せんそれが取れぬが汝の性分と、そこを見てやつた自分てあれば、宜しい、何程汝が隔てやうと、それを露更不足には思はぬぞ。否な却へて隔てれば隔てる丈け、その隔てる汝に哀はれみを持ち、益々同情の心を運ぶぞ』と、斯く私の隔ての止まざる處、如何程努めても眞からまことになしえざる所、それを眞に理解して呉るゝ人ありて、――茲て我々言葉には言はぬのてあるけれども、

『こんなに悪しくては必ず人から棄てられて仕まふ』口には出さぬが銘々この思想を持ちて居るのである。それ故そこへ一人の友來り、『成る程汝宜しく無い、故に人は汝を捨てゝ仕まふも、そのよくないことがどうしてやめられぬ、その苦しきそこを我は理解する故、その汝を哀はれみこそすれ、他く迄隔てぬぞ、呆れぬぞ』と、この何處迄も見て呉るゝ同情者に遇ふでなき限り、それ故我々何うしても隔てが止められぬことになりて居るのである。茲六つかしくて充分言へぬ處てあるのである。

一四

それ故茲を先き言ふ處でいふ時は、『貴方斯ういふ者をお助け〳〵と喜んで居るけれども、それは唯そうした貴方の思ひてないか』と。之を言はれる時は今迄の喜びは取られて仕まつて、唯悪い〳〵の思ひばかしになつて來る。そこへ持つて來て今お慈悲を言ふ時には、『貴方、その悪しいので可かぬと言ふて居るのでは、お慈悲といふことが無くなつて仕まふてないか。可かぬは誰しも知つて居るけれども、その可かぬのが何うしても善く出來ぬのぢや。その出來ぬのを見て下された不思議のお慈悲の方は、その出來ぬのが可哀相故、その者を出來ぬが可かぬと捨てずに、出來ぬ丈け彌々哀はれむとあるがお慈悲ぢや』と、これが佛の御眞實とのことになつて來るのである。それ故茲が最も肝腎の所て、茲は寧ろ一々お尋ねに接して言うた方がよいのであるが、そこて皆樣斯く聞いて、茲で何うなるか。『うん如何にもそれ程哀れみ下さるならば結構であるが、それ程言はるれば有難いとなれさうなもの。それ程迄に仰しやられゝば、も少し隔て無しにいけさうなものだ』と、之にならせぬか。若し然うあれば、私よりいふ時は、それが甚だ怪しからぬ。全體「隔てが止まぬ」と聞いて「するともう止みさうなもの」、「止まぬのが氣の毒」と言はれるのに、「するともう取れさうなもの」と、この聞きやうは何事ぢや。併しこれが又青年學生諸君にすると、他力とは一念に信仰頂いて喜ぶことと聞いて居るの故、お慈悲ぢやと言はれると、もうはや結果の方が眼につきて、先きの方が言ひ度くなるのは無理が無い。實は私共が矢張りそこになつて大に苦んだ。故にそう思はれるには同情を

持つが、併し何も『そう聞けば喜べさうなもの、』『喜べんならぬのに喜べぬは、未だ頂けて無いのかしらぬ』など、我々の方から信仰の厚などを取る必要は無い。寧ろ我々の方は『喜べませぬ、頂けませぬ』と苦しんて居るのを、『その喜べぬので辛からう、頂けぬのが無理無い』と、其處を見て取つて下されたがお慈悲でないか、とのことを申度いのである。

一五

そこは『歎異抄』九章には何うあるかといふに、

念佛まうしさふらへども、踊躍歡喜のこゝろおろそかにさふらふこと、……まうしいれてさふらひしかば——

喜ぶ心の少いは何ういふものかと聞くと、

——親鸞もこの不審ありつるに、唯圓坊おなじこゝろにてありけり。よく〳〵案じ見れば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、——

親鸞も同じことぢや。けれども一方は喜べぬから可かぬといふのを引くり反して

——よろこばぬにて、いよ〳〵往生は一定とおもひたまふべきなり。

まるて持つた捧にて毆打られたやうの話てある。一方は『喜べぬて可けませぬ』と言ふのと、『いや喜ばぬにて彌々往生は一定』と、まるて碁の攻め合ひの處である。片方は『喜べぬからいかぬ』といふのを、『いや喜べる位なら哀れみはいらぬ。喜べぬのは煩惱の所爲ぢや、その喜べぬのを可哀相に思ふのぢや』と、茲分り易きやうにて碁の攻め合ひの所、何れが勝つか負けるかといふ所てある。

一六

そこて『喜べぬて可かぬ』といふは、修養立場の眞地目な考えてある。私のいつもの風水害を陛下よりねぎらひ給ふ例ていふ時は、それ程のお手厚きお見舞ひが來て下さる上は、禮を整えて迎へんならぬといふは修養家である。處が茲て言はれるには『それは何言ふて居るか。綺麗に迎えられる位なら、風水害ては無いてないか。今は汝の風水害を見舞つたのなれば、それをするには及ばぬぞ』と茲が及ばぬぞ程度の仰せなら、安心は出來ぬ。それなら

向ふは及ばぬと言はれても、出來いては此方がすまぬとなつて來る。處が今『天に踴り地に躍るほどに喜ぶべきことを、喜ばぬにて』なることは、それ處の仰せては無い。天に踴り地に躍り喜ばんならぬことが喜べぬ。禮を調へ家を清めて迎えねばならぬのが迎えられぬ。その迎えられぬは煩惱具足の風水害の爲めなれば、その風水害で仕て見やうなくなつて居るそこを見て下されて、その仕て見やう無いのを慰めてやれ、その仕て見やう無いのを訪ねてやれ、と、之が抑〻御見舞ひの趣意であると。それ故この御見舞ひをきかされて、猶ほいつ迄も「善くせぬならぬ」を言うて居るのでは御見舞ひの御趣意が受けられたにならぬ。さりながら又今言ふ如く『惡うてもよい』で無い。『惡うてもよい』は、『善くすべきであるが、出來ないの故こらえてやらう』之になりて矢張り出來る限りは善くせぬならぬになる。處が今は斯く私が風水害の爲め何とも仕て見やうがない。その仕て見やうないを態々御見舞ひ下された思召の上よりいふ時は、私が飽く迄も『善くせぬならぬ、惡しくては可かぬ』と、いうて居る。この私の方の言ひ分が勝つか。言うてるばかして煩惱具足の風水害の爲めにいつ迄もよく出來ぬ。その出來ぬを知召して、その出來ぬを飽く迄遣る瀬無く言うて下さるこの大悲の御眞實の方が勝つか。茲は此方は何處迄も『よくせぬならぬ』を言ふてる我慢のしれ者であるが、その者に飽く迄呆れず遣る瀬無く言ふて下さる御眞實の故に、終に思召の程に氣がつくと、此方の『善くせぬならぬ』の方が敗けて、『恐入りました』と之になつて來るのである。成る程我々『善くせぬならぬ』は修養立場で結構であるけれども、今はそれが善く出來ぬて惱んで居る、それが哀はれて態々救ひにお出向き下された、この救濟の御眞實より云ふ時は、それでは救ひの御本意が頂けたにならぬ。『喰べられぬのが捨てとけぬて、その者に喰べさせやう』このお慈悲を受けるといふ時に、『けれども私金が拂へませぬ、禮が言へませぬ』は何言ふて居るのか。それでは喰べられぬ身の上で、猶ほ善き事が出來るといふ立場を存する自力根性であるとなつて來るのである。

一七

それ故近頃私のいつも言ふことであるが、親鸞聖人の書き物とか、乃至原始眞宗といはんか聖人に接近した時代の書き物には、茲が非常に際立ちてある。處が後になる程段々際立ちて居ぬ。それは聖人の時代にすると、『此方が善く出來な助からぬ、正しくせな可かぬ』と之ればかりてあつた處へ、如來救濟の御本意は、出來ぬのが哀はれて特別のお惠みであると。その故手の平反した思ひで喫驚して、不可思議の信心ぢや、誓願名號の御不思議ぢや、佛意の御不思議ぢやと、之になりて出て來たのであつた。殊に『歎異鈔』『御傳鈔』などには、本願他力の意趣とか、他力攝生の旨趣とかいふやうの文字が使つてある。本願他力の意趣は、惡人すら助ける況んや善人は猶ほと言ふなら常識であるも、今は不思議のお慈悲の故に、善人すら助ける、況や惡人は猶ほ助けるとあるが本願の趣意である。それ故我々この御意趣の程が僅かでも分つて來ると、茲に始めて私の『善く出來ない、喜べない』これを喜べぬにて彌々お見捨てなき御眞實なることが頂けて安心が出來るとなつて來るのである。

一八

處て茲に一言入れて置かぬならぬは、先般來私之をお話すると、聞かれた皆樣が、『ハー然うですか。私の隔ての止まぬのが哀はれとの御眞實。すると此方は隔てが止まなくてもよいのですな』と、茲先きいふ『然う言はれゝば止みさうなもの』となつて來るか、何ちらかになつて來るのである。處が茲は斯く隔て疑ひの止まぬを見て、その故に飽く迄隔てず疑はずして下さる御眞實。私が我慢が止まぬを見て、それが止まぬばかりに慈悲ある人の方は、何處迄もその者に無我で向ふて下さる御慈悲である。處が何程それを聞かされても此方はひどい奴故矢張り我慢を出す。出した時矢つぱり向ふは無我。如何程出しても向ふは無我人故ニコ〳〵として、何處迄も無我で向はれるといふ時は、如何な我慢な我々も、その向ふの無我の御眞實の爲めに、終に向ふの思召に氣がついて『恐れ入りました』と、卽ち結果より言ふ時は、向ふの御眞實の爲に此方の我慢を取られて仕まふ、茲が肝心の所である。我々此方から『我慢を止めぬばならぬ〳〵』これては何時迄も止まぬ。爾るにその止まらぬを見て、その者に飽く迄無我にして下さる御親切、その爲に如何な我慢な奴も、終に我慢の反抗性を取られて仕まつた處か『恐れ入りました。』そこで一念歸

命、篤敬三寶となつて來るのである。我々佛に歸命するに、初めから歸命するといふことが有る譯が無い。佛の存在をも認めぬ先きから歸命などあらせぬ。それを多くの人は信仰があつたらよからうで佛を作り出して居る。その佛は空佛で駄目であるが、今斯く私が佛に歸する心もなく、天に踴り地に躍る程に喜ぶ可きが喜べぬ。その喜べぬを見て、それが煩惱具足の故と兼て知召し、その者に飽く迄見捨て無き思ひを以てお向ひ下さる御眞實。それに終に追ひ詰められ捕へられた時が、實に恐れ入りましたと、こゝで本願招喚の勅命に歸するといふことが起つて來るのである。その勅命を承はると、『それ程迄に私の風水害を思召し下さる御心であつたか有難や』と、之が一念歸命。『篤く三寶を敬せよ』は茲で初めて出て來るのである。

一九

そこで十七憲法第二條には、

篤く三寶を敬せよ。三寶とは佛法僧也。則ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何れの世何れの人か是の法を貴まざらん。人尤も惡なるは鮮し、能く敎ふれば之に從ふ。其れ三寶に歸せずんば何を以てか枉れるを直さん。

斯く私共「自分の方がよい〳〵」の根性の塊なる人間が寄り集りなる人生、この人生に於てこのお慈悲の御心を聞く時は、孰れもお慈悲の思ひがけなき思召の程を心底から恐れ入りて、

本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なき故に。惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきが故に。

十方衆生初めてこのお慈悲一つで安心させて貰へるとなるのである。そこで今太子が『篤く三寶を敬せよ』と言はれた意味は、何も律法的に佛を禮拜せよと言はれたのでは無い。この佛の盡十方無碍の光りて、私の隔て心の取れた處の意味なのである。この廣大の御眞實の故に、私の爭ひ心の取れたことを言はれたのである。茲に於て私の我慢張る心を根底より佛のお慈悲に取られ、思召の深きに頭が下りて、之によりて我々根本的に爭ひ心より離れることを得、人間放れがして人の善し惡しに拘はらず、自分のすべきがさせて貰へるといふことが出て來るのである。茲

私の言ひ方ひどい故、信仰を得ると何人でも佛の如き心になりて爭ひが無くなるのかとの不審が出る所である。最もであるが、茲肝腎の處で、不卽不離の所である。このお慈悲頂くと、今迄人と爭ひ不和を生じて居た淺間しき根性の私が、其の爭ひ隔ての根を取られて仕まふ處が出て來るのである。

二〇

之は全體私共の心の有樣を考えて見るに、我々人と隔て苦しみて居る時は、初めは或一人と隔て爭うて居るのであるが、面白くない爲め終に誰れ彼れ無しに喧嘩が仕度くなるのである。私など耻入つた話であるが、人と電話を懸け話して居る眞最中などに、ポツリと電話が切れる。やつとかゝると又切れる。何うも電話口で腹が立つて來る。そんな時に意地惡く妙な處へ電話が繼がつて、思はぬ人がハイと出て來る。此方はギリ〳〵仕て居る處故、慳貪な挨拶する。すると向ふも何心ない處へ變に言はれて妙な具合になつて來、何故か俄に平和にあられぬ心持ちになつて來る。其處處へ人が訪ねて來られて『一寸願ひます』『マア君今日は歸つて呉れ給へ』

人生問題の結局はこれなつて居るのである。能く皆樣が信仰問題で懸命になつて居らるる時など、『何でも今日こそ先生をやつつけて來なくちやならぬ。今日こそ先生に一談判せんならぬ』と、折々斯ういふ方に出會す事がある。根本が信仰問題に苦んで居るの故話す奴が彼奴になりて、『彼奴に一談判せんならぬ。』彌々窮極の所になると人間は皆なこれになつて來るのである。故に『佛を見れば有難い、先生を見れば難有い。併し人を見れば腹が立つ』これはまだ眞劍の狀態になつて居ぬのである。こゝになると常にいふ「涅槃經」の

如來一切の爲に常に慈父母と作りたまへり。當に知るべし諸の衆生は皆な是れ如來の子なり。世尊大慈悲衆の爲めに苦行を修したまふこと、人の鬼魅に着せられて狂亂所爲多きが如し。

彌々私共苦む時になると、狂人の樣である。狂ひが彼の人は叩かうの、彼の人は撫でやうの、そんな區別はあらせぬ。酒の醉人、狂ひ犬皆是てある。私共煩惱强盛の爲めに狂ひにされて居るの故、誰れ彼れ無しに腹立てる。そこて佛その狂ひの所爲であることを見て下されて、その狂ひの奴が可

哀相である。『あゝあれは狂ひのさすことである、酒の酔ひのさす事である、煩悩強盛のなし業である』と、そこに哀はれみを持つて見たのである上は、狂ひの汝が如何に隔てやうと刃向はふと、此方は何處迄もその汝に慈悲を以て見てやるぞとある佛である。そこで如何な狂人、酔人の奴も、狂人酔人を援えてそれ程迄に思召して下さる御眞實、一念氣がついて『如何にも恐入りました』となつた時は、私の爭ふ心の無くなつたのは唯その人丈けに無くなつたのでは無い。私の喧嘩性が直つて仕まつたのである。我々それ迄人見りや喧嘩買はいでは居られなかつた性分が、ゆくりなくこの御眞實の人に遇ふたばかりて、その御眞實の故にその性分を根本から滅ぼされて仕まひ、心底から和いて、茲に於てか第三條に、『詔を承けては必ず謹め云々』——この三條になつて來なくちやならぬ筈なのである。若し信仰は信仰、君臣の義は君臣の義と、かけ離れて居るものならば、信仰なるものが有難いものにならぬ。この世はこの世、未來は未來と、茲別になつてゆくのなら、一念に後生迄救はれた處の信心にはならぬ。我々第一條の『君父に順ならず年に鄕里に違ふ』——今日迄自分の方が善い〳〵の考で居た爲め、人に爭ひを仕掛け、君父の思召にも背き、如何な貧惜の振舞ひをも仕かねなかつた處の私に向はせられ、その惡しきを哀れみ給ふが故に何處迄も憐みを加えさせられた處の御眞實、恐れ入りましたとなつた時は、能く世間では爭ひの時は『自分が惡かつた』と言うて居て、何かあると『何自分は惡く無い、向ふが惡い』それは世間の立場丈けなら然ういふことも出て來やうが、今は然ういふ具合に何處迄も人の彼是れを取上げ、人の善し惡し比較して居た爭ひ心の私が惡うムりましたと、茲てコロリと、立場が一轉して來る處が出來て來るのである。

二一

そこで私こゝは思ひ切つて言ふ。宗教として茲に力が現はれて來なくては意味が無いて無いが。人があゝあらうと斯うあらうと、人と懸け離れてゆける、茲信仰の力ある處なのである。いつかも或る若い學生の方、婦人の人が先生の善し惡し、何か先生に惡しく言はれたとて大變苦しんで訪ねて見えた。私『如何にも然う有らう、そのやうなものぢや』と同情してお話する。『有難う』と喜んで歸へられたが、又翌日來られる。同やうに私お話して又喜んで歸へられる。少時たつと又同じことを言つ來られる。仕舞ひに私叱つた。『あなた可怪しなこと言うて居るてないか。いつ迄も先生の善し惡し言ふて居て、そのやうな者に遣る瀬無く仰しやるお慈悲の方を聞かな可かぬてないか』と、それが何故然うなるかといふに、何時迄も人相手に五分々々のこと言ふて居るから、切りがつかぬ。故に茲は此方は斯く何處迄も五分々々いふてるのを、その者に何處迄も遣る瀬無くいふて下さるこの御眞實で腹ふくらせて貰ふてなければ、——茲て腹ふくれて手放しの出來た處が信仰なのである。我々人の善し惡し言ふて居ては切りがつかぬが、併しこの御眞實を聞くと、この者が機放れが出來て安心がさせて貰へる處が出て來るのである。故に私遠慮なくいふと、『父父たらざれば子子たらず』といふ意味の言葉が『孟子』か何かにある。併し信仰より言ふと、『父父たらざれども子子たり』になる。我々人の善し惡しに付ひて廻つて居るのては人生永刼に切りがつかぬ。爾るにこの永刼仕て見やうない有樣てある點を遣る瀬無く言ふて下さるお心、茲てこの難有い思召てあることに氣がついて、自分の眞に仕て見やうなき有樣てあつたことに頭が下ると、その態度は總てに出て來て、君に對しても眞に申譯けが無つた、親に對しても申譯けが無つたと、佛のお慈悲に頭が下つたのを人生に迄持つて來るは無理だといふ人もあるけれども、そうはいかぬ。頭が下つたは、自分自身の我慢が根本より折れたのてあるから、その態度は總てに現はれて來て恐れ入りましたとなつて來ざるをえぬのてある。

二二

すると近頃如き世界の動亂となつた際に於て、然う恐れ入つたばかりては立てぬてないか、との思ひも出て來るかも知れぬのてあるけれども、『恐れ入りました』にも色々の味ひが出て來るのてある。私共この人生に於て、この理不盡なる戰爭が、當り前ならば有る可きてないのてあるけれども、五分々々の人生なれば、よい事てなけれどもそれが起つ來て、即ち恐れ入れましたなれども、

戰ふ可きには何處迄も戰はなければならぬとなつて來るのである。卽ち玆が『歎異抄』の、

佛かねて知召して煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと知られていよ〳〵たのもしくおぼゆるなり。

とある所。煩惱起して善くないのであるけれども、その煩惱の止むべからざるを佛かねて知召して下されたとあるは玆のことかと、その御眞實の程に恐れ入りて安んじて、而もその下に今日如き列國對峙の時に於ては、喜ぶ可きにあらねども、やる處迄はやらして貰ふてゆくのである。そこになると此頃如き露國の形勢が緯になつて、獨逸の飛行機が頭上に飛んで來ようと、乃至その爲め國を擧げて焦土に歸しやうと、己を得ぬ。やらぬならぬ事は何處迄もやらなくてはならぬ。玆は信仰なることは、恐入りましたと閉口することかと思はれると、それなら親鸞聖人の『商ひをもし、奉公をもせよ、臘すなどりをもせよ、斯る淺間しき罪業にのみ朝夕まどひぬる我等ごときのいたずら者を助けんとちかひまします彌陀如來の本願』とのお示しが力無いことになる。玆は寧ろ、この御眞實に腹ふくらせて貰ふが故に、政治界、實業界ありとある部面に思ふ存分自由にやれる、そこの味ひは甚だ微妙にして、言に盡し難い處であるのである。

二三

これで畢つてよいのであるけれども、序にこの十一月號の『雄辨』といふ雜誌に、私はこの意味のことをお話した。それは『近頃の歐州のやうに、各國各自に自分の方が正義ぢや、正しいといふ立場でやつて居るのでは、眞の平和といふ時機は何時迄も到來せぬ。これはそういふ他が善いの惡いのと、他を相手にするので無しに、この爭ひの人生、五分々々の人生を、その爭ふ性分の故にいつ迄も苦惱から離れられぬといふ、その性分に哀れみを持ち、何處迄も遣る瀨無き思召で向つて下される御眞實。このお慈悲を頂いてこの爭ひの人生を平和に寛和出來る力ある宗敎でなくてはならぬてないか。』とのことをお話したのである。すると或人が或雜誌に之を批評せられて、『親鸞聖人は煩惱罪濁の人生と言はれたに、そういふ眞實の平和といふやうのことが考えらるゝとする時は、煩惱が無いことになつて仕まふでないか。』と言はれたのである。之は一應最もな考えであるけれども、玆は飽くまで爭ひの私に、飽くまで爭はざるみ心を以てお向ひ下された御眞實。之に恐れ入つて無益の殺生無用と言へる確信ありてこそ、今日戰爭で命がけになつて居る世界に對して、その不可なることが斷言し得らるゝのである。若しこの意味で無益の殺生を詰責するとなる時は、卽ちその意味の戰爭ともなり得るのである。併しこれは各國ともそれ〴〵意義のある積りでやつて居るのである故、そこも考えねばならぬのであるけれども——要するに私共爭ひの人生に立つ上は、煩惱の根は切れても、花は咲く。根が切れなくては次生に涅槃の極果を開かして貰ふことは出來ぬ。故に遣る瀨なき御慈悲の故に、煩惱の根切れはさせて貰ふのであるけれども、併しこの世に在る限り、矢張り花は咲く。咲くけれども根が切れてある花故、實を結ぶ花とは別である。私共苦惱の人生に、廣大の惠みで爭ひの迷ひの根は切らせて貰ふのであるけれども、この人生の波高き間に立ちて、他より仕かけられゝば、戰ふ可きに戰ひ、商ふ可きに商ひを仕なくてはならぬ。商ひ、戰ひ、何の顧慮すべきなく、力一杯働らかせて貰へるが有難い所なのである。而して廣大の惠みにより、その者が終に涅槃の城に信を以て能入させて頂く、ひとへに是れ本願眞實の御不思議である。

以上甚だ錯雜した申し方になつたのであるけれども——斯ういふことは申して却てよく無い。一念徹底の所さへ申せば、それが人生に現はれて來る結果の方は、自然に任かす方がよいのであるけれども、此の頃來られる青年求道の方々が、その信仰なることが力となつて如何に人生に活躍し來るか、それを聞くことが、それ自身が信仰を明にすることになると言はるゝから、申して見た次第である。併し反す〳〵も肝腎なることは、今いふ御慈悲頂いた自然の結果として、之れはひとりでに出て來るのであつて、それが憲法の第一條にも書いてある。卽ち『上和し下睦み、事を論ずるに諧ふときは、事理自ら通じて何事か成らざらん。』卽ち言ふ所の臣道なることは、この廣大の御眞實を頂いて、大滿足を得させて貰うた自然の結果として、人生に眞の平和を實現し、上下和睦してゆく意味である。若し民本主義なることが言ひ得べくば、是こそ眞の民本主義、それは世間の民本主義は上の主權に對する意味の民本主義であるけれども、之は民の平安を本とし給ふ大御心の程を明にする意味の臣道であると、斯く考える次第であります。（十二月二十二日夜）

信仰徹底の一念

近角常觀

思ひをつかまへて居る信仰の危險

青年の方にも同行信者の方にも、よく聞いて頂かなならぬ。信者の方の「斯う頂いた」「あゝ賴んだ」が、結局自分の思ひである如く、青年の方が長らく信仰を聞いて、喜ばしいことは如何にも喜ばしい。けれどもそれが結局自分の心に、喜ばしく思ふた單なる思ひになつて居る時は、信者の方の「斯う賴んだ」、「あゝ頂いた」が、結局何處が頂けてあるのか分らぬ如く、殊に人生上何か非常な失望すべきこと、不利なること等に行き當つた場合には、忽ち今迄のその喜びが碎け、非常な失望に陷入ることが往々出來て來るのである。若し斯くの如く彌々人生が行き詰つたとなつた際に於て、忽ち碎け、もういけぬとなるやうであるとすると、それは眞に信樂開發した一念の信心であつたといふことは出來ぬ。

之は色々の場合があられやうと思ふから、色々の方面から申し度い。皆さんの中には斯ういふ方もあられやうと思ふのである。それは今より五六年前、或人が非常に喜んで居られた。處がその方の御夫人が亡くなられた。「自分はこんなに喜んで居つたのに斯ういふひどい事が出來て來る」と、これで喜べなくなつた方があつたのであつた。之はこの夏なども隨分お子さんの亡くなられた方が澤山ある。子供の時より御催促々々と聞いて居たけれども、彌々となると「如何に佛だとて子供迄取り上げて迄催促せぬかてよささうなものだ」と、斯ういふことで喜べなくなることが、幾らも有り得るのである。之が青年は青年、信者は信者であるのである。

現に私なども先達來報恩講で諸方面に參りてお話をさせて貰ふて居る。或時話しながらふと思ふたには、「これは今日も御影向、明日も御影向であるとお話して居るのであるが、言ふてる自分が第一その心持ちになれて居るか。言ふてる自分は慣れ子になつて、その心持になれて居ぬでないか」と、斯うなるともうお話が仕にくゝなつて來る。すると「佛前を莊嚴したのが報恩講なのか」「お齋を喰べるのが報恩講なのか」「勤行をするのが報恩講なのか」と、段々話して來ると、肝腎の自分の心持ちが御影向になれて居ぬのであるから何も物がなくなつて甚だ妙なことになつて來る。

之は全體我々は信ずる時に何か物を持つと非常に信じ易いのである。この世が斯くの如くあるのが、之が神の惠みである。我々斯うやつて暮して居れるのが、佛の慈悲であると、之れなら甚だ說き易い。處が唯「可哀相に思召し下さるのである」唯「哀はれんで下さるのである」から、甚だ分りにくい。卽ち信者の人なら、極樂に參れるで聞かな、得心がいかぬことになつてある。總て我々は何か物を持ちて解き度い〳〵といふ風になつてあるのである。處がそれて喜んで居る信仰であると、彌々となるとそのものが必ず碎け出す。死ぬと極樂に往くを喜んで居るのであると、現在死ぬのが厭でならぬのであるから、彌々となると必ず駄目になる。我々斯くの如く平和に生活が出來るのがと思ふて居るのであると、その平和は必ず破壞する時節が現はれて來る。私の心に眞地目に考えられるやうになつたからと、それで言ふて居るのであると、それも必ず碎ける時がやつて來る。總て斯くの如く、物を持ちて安んじて居る信仰であると、その物が碎けて、信仰の中心たるものが無くなつて仕まふ時が出來て來るのである。

嘗つても申したことであるが、能く道を求めて訪ねて見える方が「佛が〳〵」と仰しやる。私「貴方はその佛が分つて居ぬのでないか。それは貴方の思ひて、然う思うて居る迄の佛に過ぎぬて無いか」と、斯く言はれると忽ち消えて仕まつて空虛になつて來る。現に私自身が長らく非常に喜んで居つたのであつたけれども、一つ行き詰つた爲に、今迄の佛が何處へか行つて仕まつて、宇宙の本體、眞如の哲學、一文の價値も無くなつて仕まひ、四方八面唯賴みなきものばかりとなつて仕まつ

たのであつた。すると然うなつた時そういふ喜びに止つて居て何うするか、と申すのである。

「斯る者を御助け」の語に何等の安心味無し

此間も越後から或る僧侶の方が、久し振りにお出で下されて、頻に念佛をお稱へになる。私、大層貴方よくお稱へになる』といふと、『イヤ此頃は大分稱へさせて貰ふやうになりて、第一近頃は念佛の趣味を感じるやうになつて』と申される。私『へい、念佛の趣味も結構なれど、一つ貴方聞いて行かれては何うか、貴方いつお歸りになる。』その方『今晩歸る積りで居たのだ』とのお話である。私『何うです、一日延ばして明日聽いてゆかれぬか』と申すと、『イヤそふいふ事なら、一日延ばすことに仕ませう』と申される。私『貴方能くお延ばしになりましたな』『イヤ先生が私の爲め御教化下さるとあるのですもの』と、斯ういふ態度でその日もお話申上げ、翌日も聞いて下された。そして段々話した最後になつて、その方『どうも自分は最後になつて分らぬことがある。自分は斯ういふ風に段々喜ばして貰ふて居るのであるけれども、最後になつてどうもひと所面白くない。それは段々やつて最後に、斯るものを御助けと、自分はこの斯るものを御助けが面白く無い。こんなこと言うてるのだと、何んな悪いこと仕ても、斯るものを御助けと、甚だ邪見に墮ちて仕まひそうで、どうも氣に喰はぬ。之は何ういふものであらう』と。之は信者の人が『斯う頼まれた、あゝ頂けた』と、さんざ揑ね廻はして、何うしても夫れでいけぬやうになると、斯るものを御助けと、この癖がある。私之が甚だ氣に入らぬ。『今日は御正忌御照覽の席である、けれども私は汚いもの、耻入つたものである、けれども佛は斯る者を御助け』と、こんなことでやつてゆくのなら何んな悪い事しても差支ない事になつて仕まふのである。それ故其の方も、前々から茲を不審に思はれて居たそうで、或時或人にその事を聞かれたら、その人は『その邪見が眞宗の有難い處である。何んな悪い事しても、それを何處迄も捨てゝ下さらぬ處が、眞宗の眞宗たる處である。』と、そう言はれたけれども、自分は

どうもそれでは心が落ち付かぬ。之は何ういふものであらうかとのお尋ねであつたのであつた。私は信者の人の中には、必ずこれになつて居る方が少くなからうと思ふのである。一方に針の先きで突いた程のこと迄眞地目に〳〵とやつて、最後にそれでもいかぬ處が出て來ると、「斯るものを御助け」と、之て一邊に追ひ放しに仕て居て、それで氣が付かずに平氣で居る。うつかり仕て居るのであるけれとも、一つ本氣に考えて來ると、茲でこの兩刀使ひになつて居て、眞に安心にはなれぬてないか、とのことを申すのである。

成る可く信者の方のお分り下さるやうと思うて話して居るのであるが、私など煩悶した時が矢張り之になつて居るのである。他く迄眞地目に〳〵と考えて、又眞地目に爲し得る積りでやつて居る中に、「待て！自分の心が人に善く思はれ無いと滿足が出來ぬとして見ると、自分は今日迄犧牲的にやつて居る、献身的にやつて居ると思うて居たのが、皆な是れ名譽心でやつて居つたのでなかつたか」と、私の苦くなつたのは茲だつたのであつた。夫れ迄隨分理屈も言うてゐた。極樂に立派に佛がお出でになると、さながら綿に書いたやうな佛も、あつたのであつた。が、それがいよ〳〵自分がいかないとなると、皆な消えて仕まふた。そうなつた時にそこで「斯るものを」が利くか何うか。「私は腹が立つ、斯るものを御助け」これは出來る。「人に言ひ過ぎた、斯るものを御助け」これは出來やう。が自分が悪く殘らず悪しくなり、一文の價値も無くなつた時に、「斯るもの」で安心が出來るか、到底そんなことで安心がなり得ぬのである。私共若い時分には茲の處で聞き違えて居た。それは佛は「悪うてもよい、悪うてもだぢないぞ」と言はれるのだと聞いて居た。處がそれは、私がよくないと思ふて居る處へ、「そのよくなくてもよいのだぞ、悪くても構はぬのだぞ」と、言はれるとなるから、何程そう言はれても、私の方がちつともよく無い。何程悪い儘と聞かされても、それでは少しも安心にならぬ。「今日は御正忌御影向のお日柄である。けれども私はちつともそんな氣がせぬ。けれどもせいでもよいのだ」と、之ではどうしても本當の安心にはなり得ぬではありませぬか。

實意ある友の一言

そこで何より言はんか、先づ私の氣持ちより申しますに、この時私が惡しくてよいのだと言はれて、私にはちつとも安心にならぬ。これは今日青年の思想界に於ても「今迄出來ぬことを仕やう〳〵と仕て居たから可かなぬだのだ。寧ろ出來ぬ有の儘を打ち出して安心しやう」と仕て居る側がある。處がこの「出來ぬのでよいのだ」て安心が出來れば誠に結構であるけれども、今いふ如くて之では本當には安心が出來ぬ。この時眞に私の苦しき心中を見て呉る〻一人の友ありて、『如何にも君がそれ程迄に眞地目になり、何處迄も獻身的にやらうとした處の誠意は認める。けれども人間なるものは、結局我慢の代物で、何程自分を捨てゝやらうとしても、最後になると自分を捨てることが如何しても出來無いのだ。』と、――之は妙なことを言ひますけれども、私はその時こんな愚痴が思はれた。それは「自分はこれ迄眞地目に〳〵と思うてやつて來たのであるけれども、最早や斯くなる已上は何とも仕やうが無い。自分はこの儘身を捨てゝも、それは仕方が無いとして諦めもするが、けれども世の中が斯く強い者勝ちで、眞地目にやる者程却つて滅亡するとする時は、自分の事はよいとしても、之では世の中が分らぬことになつて仕まふ」と、斯ういふ風に考えた。「斯くの如く世の中が各自に勝手にやつて居る時は、眞地目にやる者程仕損になつて、自分の事は仕方が無いとするも、之では世の中が成り立たぬ」と、斯ういふ風になつて來た。大層理屈のやうであるけれども、之が世の中がて無い、やはり自分なのである。自分が我慢さへ捨てられゝば、何も世の中がといふて苦まんならぬことは無いのである。そこでこの捨たらぬ樣を見て呉れた他の人が『汝それ程眞地目に捨てやうと仕て居るのであるけれども、その捨てられぬのは捨てられぬのが最である』と、茲で「捨てられぬから、我慢を起してゝもよいのだ」といはれて私は面白く無い。が『それ程眞地目にやらうとしてもその捨てられぬ汝の苦衷は察するぞ。それ故我はその捨てられぬ汝を何處迄も見てやらうといふのである』と、私にはこの一言が何より有難いのである。そこで今

他力本願の旨趣は、斯く私が飽迄まことてやらうとしても、我慢が捨て切れぬ。そこを「捨てられ無くてもよい」で無い。その捨てられぬ處が可哀相で捨てとけぬのが發願の旨趣なれば、捨てられ無い限りそこを何處までも見てやるぞと、一念、佛のお慈悲なる事は、今面の當りこの不思議の呼び聲なる事に目がつけば、この一語こそ實に我等の胸の中心を貫かるゝ處の一語であるのである。爾るに茲の處がしつかり聞えぬから「眞地目になれなくてもよいのだ、淺間しくてもよいのだ」と。すると「向ふはよいと言はれても、此方がそれでは困る」と、大低が之になつて居るのである。

そこで彌々一念徹底の味ひは、我々自分の思ひて思へるのて無い、向うからこの遣る瀬無き思召て何處までも言うて下さる、その御意趣の程を聞かせらるゝと、茲て此方から受け心を言ふに及ばぬ。受け心はひとりでに出て來る。敎えて貰ふことは入らぬ。『ウン成る程このどうしてもまことになり切らぬ、茲をそれ程迄も思召して下されたのであつたか有難い』と。で『斯る者を』は、こゝて出て來る。本當の『斯る者を』は、このお慈悲が聞えて出て來た言葉であるのである。處が「信心が何うぢや、安心が斯うぢや」となると「斯る者をと聞くのぢや」となるから茲が空になる。而してその出て來た處が、一念歸命の信樂開發と、こうであります。

自分の惡しさ丈けに上つて居る信仰

處で茲て言はぬならぬは、殊に青年の人に之が多からうと思ふのである。それは自分の惡いといふ處までは皆なが分る。苟も信仰を聞く程の人は青年、信者に係はらず、茲まて來て聞く程の人は、どんな事ありても安心が出來てるといふ人は無い。皆な行き詰つて居られる。この先き行かぬ人達ばかりてある。それ故これらの方々の心中には、「自分は惡い！」と、この行き詰まりが出來てある。而してそのあとへ動もすると――喩えば『今日迄善いと思ふて居つたのが、皆な惡かつた。如來のお慈悲は斯る者を御助け』と、茲へ「お助け」の言葉を持つて來て、

それで幾らか安んぜられた如く、自らも思ふて居る場合があることである。こゝの「お助け」の言葉が甚だ宜しく無い。それが皆な内容が空虛で、唯言葉丈けになつてある。『自分は實に惡い者である、佛のお慈悲は斯ういふ者をお助け』と、之が唯言葉丈けになつて居つて、其の實何うとも出來て居らぬ。處が之が非常に多いのである。眞地目なる方でお助けを言ふ人は、大低こゝに止つて居られる事が多いのである。而して之になつてある時は、外觀甚だ優しくなつて來る。『あゝ今迄人に親切にして居た、まことにして居たと思ふて居たのが惡かつた』と、之れになつてあるのであるから、成る程頭は下つてある。故に他から見ると「甚だ心の優しい人」となつて來る。又斯くの如き精神狀態にある時は、隨分人に對しても寛になし得る。人が惡しくしても『あゝ皆んながあれだ』と、之になつて來るから寛になる。頗る融通が利いて、信仰らしくあるのであるけれども、之が實は自分の惡いどまりになつて居て、御眞實の要の處は屆いて居ぬのであるから、茲の處はよく申さなならぬ。卽ち之ではまだ華が開いて居ぬのである。かつて斯くの如き喜びにある或人が自己の心中を語りて、まるで猫の頭に紙袋をかぶせられたやうで、あとひざりするばかりで、一歩も前へは進めぬと話された。卽ちそれだと、消極的にあとひざりにはなれるかも知れぬが、自ら信じて立つ力が出て來無い。爾らばそれが何處で華が開けるか、信業開發するかを申さねばならぬ。

言葉に現はし難き御眞實の內容

それは斯うである。私共の言葉の下には、言葉として口には出さぬ處で考えて居る所があるのである。卽ちいつもの風水害の喩で言へば、私共が『綺麗な有樣でお迎えすることが出來ぬ、禮を整えてお受けすることが出來ぬ』といふ。之に對せられて御眞實のお方の方は、『イヤそれが出來ない汝であるから、そこを見てやるのぢや、そのなせないのが可哀相故態々見舞つてやつたのぢや』と言はるゝといふ時は、言葉は甚だ簡單であるけれども、實はこの意味になつて居るのである。卽ち私が實は綺麗に仕度いのであるけれども衣食にすら困つて居る折柄故、綺麗にしてお迎えすることが出來ぬ。爾るにそれが出來ぬて行き詰つて居る點に眞實を持つて下された方は『その穢いよごれて居るのが可哀相でならぬの故、よごれて居てもよい位の話でなく、その穢ないよごれて居る者に腹一杯滿足する丈け喰べさせやう』この意味が這入つてあるのである。之は私共苦しんで人と心を隔て、不足を言ふてる時に、私共の心は何うなつて居るかといふに、『自分がこんなに人に隔て、不足を思ふて居るやうてある時は、おそらく人が「あんな隔て根性の奴、疑ひ深い奴、あんな奴はいかぬ」と皆なが斥けて居るてあらう』言葉には出さぬが心の底にこれが出て居るのてある。譬へば盜人が何か人の物を取つたとする。取つたのは一軒であるけれども、その爲め監獄に入つたとなれば、既に天下の盜賊である。故に『彼奴には物を隱くせ、用心しろと、皆の者が必ず言うて居るてあらう』と、この思想が這入つて居る。事柄は一つてあるけれども、その一つの爲に四方八面が閉ざゝれて仕まひ、相手丈けならず、『總ての人に善し惡し思はれて居るてあらう』この思想がある。昨夜も思ふたのてあるが、水戸さんの時に或奴が自分の親を殺した。人が何故殺したと言ふたら、『ウン人の親を殺したのぢや無い。俺の親を俺が殺したのが何故惡い』と言ふたといふ話があるが、一つ惡い爲めに『四方八面惡しく思はれて居るてあらう』必ずこれになつてあるのである。言ひ換へると私自身がそれ迄人を左程惡しく思はなかつたのに、思ふやうになつた。又、自分は眞地目にやつてると思ふて居たが、甚だ不眞地目であつたことに氣がついた、といふはこのことであつたのてある。『私の全性格が何うしても人に對して善し惡し思ふ心の止まぬもの、この心を人に言ふたら、誰だつて必ず愛相をつかして、そんなもの可かぬと呆れて仕まふてあらう』と、この考えがあつた爲め、私は四方八面動かれなくなつて仕まつたのてあつた。

さて斯くなつた時に、『自分はこの如き仕て見やうなき者である、此の者を佛は御助け、茲を哀はれと言うて下さるのてある』と、これてこゝが開けるかといふに、到底開けぬ。唯そういふ言葉が空にそこへ這入つてる丈けになつて。到底

そんなことで茲は展けては來ぬのである。斯ういふ信仰狀態に青年の人は兎角なり易い。而して斯うなつて居る時は私の話も最早や聞く丈けの氣がせぬのである『先生に言へば、それはそこが哀はれと言はれるに決つてある。そんなこと何程言はれたとて、この仕て見やうない者は仕やうが無い』と、又中には『他力の話は私共の善く出來ぬのが哀はれとあるの故、私が如何程惡しくても、そこを哀はれ〳〵と言ふて下さるがお慈悲の有難い處である』と、腹はちつともふくれぬといて、詮方無しにお慈悲々々と思ふて居ることがある。

私は決してそんなことは申して居らぬ。何うかといふに、私がその隔て疑ひの性分が止まぬ故、『これては可かぬ、人が必ずイヤに思ふてあらう。』かく思ふて困つて居る處に佛は『イヤ〳〵汝がそれ程まことに努めても、根が隔て疑ひの性分の汝故、何うしてもそれが止み切らぬ。止まぬで汝が如何に仕て見やうなからうと、その止まらぬ苦衷を哀はれと見てやつたのである上は、設令人は何とあらうと、自分ばかしは、汝が如何程隔て惡しく思はふと惡しく思はぬ。根が無明黑闇に閉ざ〳〵れた狂ひの性分の汝故、その狂ひを哀はれと見た上は、狂ひが打つて來やうと、逆つて來やうと、夫れを一點不足には思はぬぞ。此方はどこ〳〵迄も、汝のその善く出來ないを哀はれと見る上は、その出來ぬ汝に、何處々々迄も善く仕てやるのであるぞ。……』と、何うもこゝが言葉におちて充分申されぬのであるが、唯出來無いのを哀はれといふ丈けの言葉でない處がある。併し茲は出來る丈け能く申して置かなならぬ。

甚だ無遠慮な例であるけれども、先年財産上の破綻がもとで、自殺せられたる彼の大阪の岩本さんである。大阪市に百萬圓の公會堂を寄附せられたる程の人が、財産上四方八面不義理な立場となつて、申譯けなさに自殺せぬならんとなつた時に、若し氏の爲めに眞に眞實を運ぶ一人の友人があつたとしたら、『君がそこ迄眞地目な考えでやられても、運拙くして終にその仕て見やうのない立場とならなければならなかつた君の苦衷に同情する。それ程やられてもそのいかなんだのが眞に氣の毒だと見た上は、僕はそのいかぬ君をその儘に捨てゝ置くので無いぞ。有り切りの全財産を提供して、僕の志を運ぶのだぞ』と、これが附いて來なければ本當の同情にはならぬ。若し之が無かつたら哀はれむといふことは、唯言葉丈けになつて仕まうのである。故に今佛が私の本當に出來ない處が哀はれとあるは、出來無い者ならば何と藻掻いても結局駄目である。此方が隔ての性分が止まぬければ、何處迄も人からも隔てられて仕まふ。斯くなる外に仕て見やうなき人生に、『その隔ての止まぬ性分と生れついたが哀はれと見た自分ばかしは、汝が何程隔てやうと此方は隔てぬぞ、汝が何程よく出來なからうと、出來ぬ限り此方は何處迄もその汝を捨てぬのであるぞ』と、この御眞實心であるこゝを聞かな、我々本當に華開くといふことは無いのである。

御眞實の故に終に此方の我慢が折れる

之は他力の味ひは甚深微妙なもので、佛の五刧永刧の御苦勞といふことを申して居る。全體何が五刧の思惟かといふに、阿彌陀佛が我々を助けて下さるに、戒行坐禪の及ばぬ我等なることを知召して、この何れの行も及ばぬ者が可哀相と、之を救ふに南無阿彌陀佛の一法を選擇攝取して下された、といふ之が五刧の思惟といふことなのである。言ひ換へると我々如何程まことにしても、結局一つとしてまことに爲し得ない。その爲しえ無いを哀はれと見た上は、出來無い事を無理にせよとでは無い。その者に稱えらるゝ南無阿彌陀佛をといふ、このことである。處で心で唯そう考え、口に唯そう誓うた丈けでは何もならぬ。相手が善し惡し五分々々根性の塊で、中々一應二應でたやすく言ふこと聞く奴でない上は、『よろしい、そちらは何程爭ひ隔ての心で向はふと、此方は飽く迄その者に隔てず爭はず飽く迄無我無碍にして、終に向ふの惱み、缺陷の滿足さるゝまでまことに仕てやらなくてはならぬ』と、卽ち

永刧の御苦勞なることは何かといふに、その私の不實、我慢の仕て見やうなきに對して、之を哀はれませ給ふ佛の方よりは御眞實心の上よりしてその私に飽く迄爭はず怒らずして遣る瀨なき心を運んで下さる、之が永刧の御苦勞といふことなのである。卽ち逆らう子供に

對して他く迄道らはず眞實にして下さる御心。こゝになると、その親の優しさが勝つてその思召の程に不實の子の方が恐れ入るか、子供の不實の方が終に親を呆れさせるか。こゝへ來ると佛の無我人にてましますといふことは、私の方は隔て、我慢の奴故何處迄もその思召に對して喧嘩ていく。處が佛は本來何事に對してもその喧嘩で來る性分が哀はれと、その性分に涙を持つて下されたのであれば、此方が喧嘩ていけばいく程益々和言愛語で、『もつと優さしく仕てやらなければならぬ〳〵』と、いつ迄も向ふは無我て向ふて下さる。この喧嘩がいつ迄も喧嘩の儘で續く譯けは無い。終に此方はこれ程やるに、向ふは他く迄無我とは妙な人と、初めて向ふの思召に氣がついて來るといふ、茲を頂かな信樂開發するといふことは無いのてある。頂くといふと六かしくなるけれども、此方に仕なければならぬ事が一つとしてあるので無い。此方は我慢て遣り果す丈けてある。けれどもそれに對して他く迄隔てず、哀はれ〳〵と無我に向はせらるゝ、其向ふの思召が一點見えて來ると、『そういふ忝けない御眞實であつたか』と、此方の我慢が終に茲て向ふの御眞實の爲に敗かされて恐れ入つて、するとその一念にその御眞實の故に、此方の心が腹一杯充たされて

本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆゑに。惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なき故に。（歎異鈔）

と、これになつて來るのてある。處が茲が間違ふと、『なに向ふは親ゆゑ、此方は何處迄我慢張りても、そこを見て下さるのが親だ』と、これになると甚だしき邪見になる。處が此方が何程我慢張りてゆきても、向ふは何處迄もその我慢を哀はれませ給ふ無我のお心。その無我の金剛石の御眞實の故に、喧嘩買ひに行つた此方の石瓦の方が終に碎かれて、此方の方が恐れ入つて、亡くなるのてあるといふ茲で安心させて貰ふことが肝腎である。

處が茲は碎かれる我々の方より、何程『碎けるのだ〳〵』と骨折つても分らぬ。茲は何うしても向ふの御眞實の仰せの方を聞かな分らぬ。私など苦んだ時には、親切にして呉るゝ友人に對して、『友人があれ程隔てず親切にして呉るゝ。之に對しても有難いと

言へぬならぬのてあるけれども、それが言へぬといふは』と、彌々此方の方からは隔てゝ仕舞ふ。『この恐ろしい自分の心持ちを言ふたら、あの無我な友人も、必ず呆れて仕まふてあらう。屹度友人の無我を傷つけて仕まふてあらう。』と、これて何處迄も私の方は隔てゝ行つた。すると友人の方は言葉に出しては言うて呉れぬけれども、『イヤその君の隔ての止まぬのに同情するの故、それをちつとも僕は惡しくは思はぬ。』そう言はれゝば言はるゝ程私の方は、『あれ程言うて呉るゝのにちつとは善くなれさうなもの』と、益々心が苦しくなつて行つた。終に友人の方は、『君、もうよい加減に仕て置き給へ。隔てるのは君の性ぢや。その性の止まらぬのが僕は氣の毒なばかしなのだから、君が何程隔てやうと、僕はちつとも念頭に措かぬのだ』と。すると私の方は彌々『あれ程言うて呉れたら、此方の心も少しは止むだらうに』と、卽ち之がある限り何うして茲はいかぬ。卽ち『一念歸命の時刻が必ず有るだらう〳〵』と、之になつてる間は何うしても茲がいかぬのてある。故に極端てあるかも知れぬけれど、私は斯く言ひ度い。隔てを私の方から止めることは出來ぬのてある。が、その隔ての如何しても止まらぬ汝が哀はれ〳〵と、茲は私など寧ろ人間的に味はして頂き度い。私の方は、『君は然う言うても自分は斯く〳〵の惡しき心がある』といふと、『イヤ〳〵それも分かつて居る、それがあると見たから、此方は心を運んて居るのぢや』『イヤこんな淺間しい心もある、こんな僞りの心もある』といふと、『ウン夫れも分つて居る〳〵』と、他く迄私の心を先きへ〳〵と見て下されて、その私に他く迄無我にして向つて下さる御眞實と、之を聞かせられると、その一念に寧ろ私の方が呆れ、喫驚して、『それ程迄に哀はれみ思召して下さる御心であつたか、よくも〳〵』と、初めてその御眞實の故に私の我慢が折られ、有りとあるもの皆な融かされて、

本願力にあひぬれば、むなしくすぐる人ぞなき、煩惱の濁水を隔てぬお慈悲の光に遇ふにより、煩惱の氷が殘らず融かされて、功德の水となり、炭の私が炭のある限り遺らず火となる。信樂開發とはこゝの味ひなのであります。

「やらんならぬ」と「やれる」とは別物である。

處が能く注意せぬと、茲が說く者も說き足らずに居り、聞く者も聞き足らずに居る。『私は我慢が止まぬけれど、佛は之れを哀はれと言ふて下さるのである。けれども私は矢張り我慢が止まぬ』と、動もすると茲が抜き差しならぬことになつてある人が多い。それでは腹はふくれぬのである。眞のお慈悲は『可哀相といふ上は、その仕て見やうないのをその儘捨てゝ置くものか』と、茲になると大阪の岩本氏の話が救ひの精神を語るに非常によい。先づ若い人達は、眞地目なる考え、理想的な考で居らるゝの故、その點よりすると岩本さんが、人に損をかけ、殊に市に百萬圓の公會堂を寄附した程の者が、人に再び立つ能はざる程の迷惑を懸け、如何しても面目が立たぬし、又人に對しても何とも相濟まぬと。この考は眞地目な若い人の側を代表するし、又『何程思ふても我等凡夫は何うしてもよく出來ぬのだ、佛のお慈悲は斯る者を御助け』と、之になると北濱銀行式になりて、一慨には言へぬけれども同行信者の間にはこの北濱銀行式が多い。この場合に於て、岩本氏の立場を眞に理解し同情し、理解するが故に有らゆる者を投げ出しても何うしても救はずには措けぬといふ一眞友が、『君が飽く迄眞地目にやらんとせられた精神は充分了解する。けれどもそれが思はぬ結果に陷入つて君も嘸殘念だらう。その思ふやうに行かない君が、いとしくて、その君を救ひ度いばかしの僕なれば、友情として捨てゝは置かぬぞ、僕の全財產を投げ出して何處々々迄も救ふぞ』と。斯く言はれると眞地目な方の考の人は、『イヤ君の然う言ふて下さる友情の程は眞に感謝する。けれども自分の仕てかした責任なれば、何うしても自分でよく仕なければ相濟まぬ』と。それ故餘の宗旨の人は、眞宗は善因善果惡因惡果の、この道理脫れてあると非難する。それは當り前より言ふ時は、『自因自果他を咎むる勿れ』で、自分の仕出かしたことは、何うしても自分で負はなければならぬ。けれども一方の人はその負はなければならぬことが負へぬで嘸辛からうと、そこへ同情を持つて呉れた人なれば、『成程君の自分で仕出かしたことなれば、自分でやらなければならぬと言はるゝ言は最もであると了得する。けれども君、やらなくてはならぬ〳〵言うて居て、君本當にやることが出來ますか、眞に眞地目にやることが出來るのですか』と、茲へ來ると『やらなくてはならぬといふ事と、やれるといふことゝは別物である。やらなくてはならぬことが、やれぬて、そのやれぬのが哀はれて、茲へ救濟が現はれて來る。此間も人を救濟などすると、何うも人が働かぬやうになつて可かぬとの說があつた。けれども救濟とは現に喰べられぬ人間がありて、哀はれて捨てとけぬから救濟である。今岩本氏の場合に、『君のその自分ですべきことが出來ないで居られる。それ見ると如何にも無理がない、故に僕は君の出來ないのをちつとも惡しく思はぬ。思はぬばかりか、僕が金を出すは、聊かその同情の表示である』と、斯く言うて呉るゝ者があつたら何うか。之れ聞くと、『あゝ今までやります〳〵』と、飽く迄我慢張りて居たが、その我慢ばかりて實は返へせぬ者を、斯く迄捨てずにこれ程に言つて呉れたのか、濟まなかつた』と、機の深信が他力であるといふは茲てある。動もすると、我々が行き詰まつた有樣を以て、機の深信と思ふて居る人がある。それであると、岩本ともある者が人に金を出させては名折れである。困つたものだと、猶ほ我慢ばりて居る姿になりて、御眞實を頂いたにならぬ。處が此方はその我慢で飽く迄隔て、人の親切からは遁げやう〳〵と仕て居る。處が向ふは飽く迄遁げれば遁げる程その我慢の性分に眞實を持ち、彌々捨てずに隔て給はぬ不可思議の御實意であることに一點目がついて來ると、『あゝ申譯けなかつた』と、初めて思召の程に此方の我慢が折れて、機の深信はこれてある。私共如何に行き詰つても、『もう何とも仕て見ようがない』とこれ丈けでは安心にならぬ。此方は『困つた〳〵仕やうがない〳〵』と言うては隔て、――又中には隔てゝ居ぬと思ふて居る人もある。隔てはそう思ふて、『よく出來て居る』と考えて居るその性分にあるの故、矢張り同じことである。その私共根本性分に哀れみを持ち、その者に飽く迄隔てず無貪無瞋無癡の心をもつて向つて下さる、この御眞實にてましますことを聞かせらるゝと、極言なれどもその御眞實一つの故に心ぞこから腹ふくれて、我々の隔て心も取られて仕まひ、迷ひの根切れをさせて頂く。『報恩講式文』に

至心信樂己を忘れて速に無行不成の願海に歸す。

とある、一念開發の信樂の味ひはこゝてあります。

歸命の一念

蓮如上人の「後生助け給へ」の意義

私はいつも受け心を言はぬ

一　私はお話するのに、いつも受け心を言はぬ、お見捨て無き御眞實丈けを言ふことに致して居る。これは何故かと申すと、私の申す信心に受け心が無いからでは無い。人に物を與へるに、之を遣るから有難いと言へといふことは無い。有難いは與へる物が眞實の物なら、ひとりでに必ず起つて來るからであります。

二　併し之が間違ひ易き點故よく申して置かなならぬ。私の話が動もすると、惡くても淺間しくても、佛が善く仕て下さるのだからと、受け心の無いことに取つてしまはれることがある。之では私の思ひは屆いて居ぬのであります。道樂者の父が、子供の金を浪費するのが可哀相なからとて、廣く功德の寶藏を開きて何程でも下さるのに、親は何れ程でも呉れるのだからとなれば、受け心の無い信心となる。この道樂者を、誰も言葉も懸けて呉れる者が無いのに、その言葉の懸けて呉れても無くなつたのが益々可哀相で、親は彌々情けを加えて下さる思召であつたかとなると、初めて親心の受けられたことゝなるのである。而してその親心の受けられて、親のお慈悲に初めて頭の下つた處が、一念歸命となるのであります。

古來歸命に三說ある

三　之は餘り申さぬのでありますけれど、古來歸命に三說がある。中には歸命を翻譯して、テーク、レフュージともある如く、隱家を取るといふ意味に言ふのもある。けれども先づ大體に於て一つは命を捨てるといふ意味にいふのである。之は本當に命を捨てるのである。文字の意味の取りやう丈けでなく、眞に命を捨てるのである。もつと善くせぬならぬ〳〵と誠を盡して、遂に命を捨てる迄やる。極端にいふと多くの人の中には、

『眞實にせぬならぬ〳〵』、『こんなことでは可かぬ〳〵』と、終に實際に命を捨てる迄やられる方すらあるのである。之は飽く迄自ら誠にせんとする眞地目にやる方の側なのである。

四、又一つは命に歸ると讀むのがある。それは佛の命に歸ると讀むのである。佛の命に歸るとなると、悟のやうになつて、それは私を助けんと佛が現はれて下されたの故、佛の方で私を救ひとつて下さるのである。故に我等に於ては、信仰を獲るのなんのと、六かしく言ふのが間違にて、我等は佛の命に歸へればよいといふのであつて、之だと余程悟り風の歸命となる。卽ち石童丸が辛苦艱難して親を搜すのが前の命を捨てる方の歸命なれば、現在我等が斯うやつて在るのが、佛の救ひの中に居るのだとなると、今の命に歸る方の歸命である。處でこの二つが、何ちらも本當の安心にならぬ。一方は血を吐く思ひでやつて〳〵、遣り拔いて安心がならず、一方はこれも惡み、あれも惡みと、自分の煩惱生活を怨し、放任して置いても、本當の安心は來らぬとなる。

歸命といふは本願招喚の勅命なり

五　すると本當の所は何れてあるか。今の『私の惡しきを善くして』ともなく、又『惡い儘』でもなく、その惡しきを哀はれむ親心として、『汝の惡しきを惡しく思はぬのだぞ、その汝を飽く迄捨てぬのだぞ』の、本願招喚の勅命に歸する、この歸命である。之になると嚴肅にして、恰も　陛下の勅命を聞くの思ひであります。

六　之を私の譬でいふならば、先達ての如き風水害の際に　陛下より態々侍從を使はしてお見舞ひ下さるとなる。陛下の御勅使をお迎えするのだから、席を淸め威儀を整え、禮を全くしてと、それに氣を揉むとなれば、これは命を捨てる方の歸命である。イヤ既に風水害で仕やうがなくなつて居るのであるから、綺麗に迎えぬならぬのであるけれども、夫れは出來ぬ。その出來ぬのをお見舞ひ下さるのであれば、出來いても構はぬのぢや。出來ぬのを救ふて下さるのであると、自ら怨してやつてゆく方になれば、今の命に歸へる方の歸命となる。これでやつて居つても然うは自ら許して居るものゝ、中心からの安心は出來ぬとなる。

七　すると彌々の陛下の勅命は如何。汝自身を考えて見よ。善くせぬならぬのだと言ふて居るも、眞の大御

心を知らぬのであれば、悪くてもよいのだと言ふて居るのも、思召の程を聞かぬのである。全體汝が風水害に惱んで居る故、夫れを哀れみ思召されての態々の御救ひであれば、この時に於て禮を『盡くさんならぬ』でも、又『盡くさいてもよい』てもて無いてないか。その爲んならぬ事が出來ぬのをは哀れみ思召されて、その出來ぬ汝を特に見て來よとの　陛下の思召は、その出來ぬ汝の爲めに特に御心を寄せさせ給ふ篤き仁慈の思召ばかりであると。之を聞かせらるゝと勅命如何にも嚴かにして、我等に於ては、唯々御心の篤きに恐れ入り、今迄善いの惡いのといふて居つた、自分の隔て心の淺間しきを恥入つて、思召の深きに感泣する外ないとなる。そこて妙てある、親鸞聖人の御時代に接近した原始眞宗の書物を見ると、これに非常な嚴肅な文字が使はれてある。卽ち本願他力の意趣とか、他力攝生の旨趣とか。

八、全體そうした本願他力の旨趣が抑々何にあるかといふに、今言ふ如く、『惡くてもよい』ても無ければ、『爲んならぬ』と力むのでも無い。何程思ふてもその善く出來無いのが哀はれてならぬ故、その善く出來無い限り、その汝を何處迄も救はなならぬとあるが、抑々本願他力なることが現はれ來つた旨趣なのである。すると現在私のこの善く無い限り、衣食の缺くる限り、之を何處々々迄も眞實を以つて見てやらうとあるが他力救濟の趣意故、その勅命を聞く一念に、我等に於ては、『然ういふ不思議の御眞實であつたか、有難や』と、至心歸命し奉るとなつて來るのである。

九、それ故親鸞聖人は『行卷』に、

歸の言は又歸說（ムナリ）なり。說の字は悅の音、又歸說（ミリタノ）なり。

悅とて中心より滿足し、說とて中心より『よりかゝり』『より賴む』意味が、他力の歸命には具つて來るのである。而してそれが蓮如上人の『御文』に來た故、『御文』には

歸命といふは衆生の阿彌陀佛後生助け給へと賴むこゝろなり。

處がこの蓮如上人の言はれた意味が、先きの命を捨てゝ求むる意味に取るから、皆んなが六つかしい事になつて來るのである。

鎭西でいかず西山でいかず、他力眞宗でなくてはならぬ譯

一〇、全體この歸命の三通りの意味のとり方は、信仰上の三形式で、歷史はいつも之を繰返すことになつて居るのである。現に法然聖人から出た鎭西の聖光上人の方、卽ち只今の鎭西派は、南無阿彌陀佛々々々と眞地目に念佛して、此方より佛に向ふ方の側である。故に眞宗などに比べると、鎭西派の人達は眞地目に念佛し、眞地目に誦經をもせらる。鎭西上人が言はれたには、恰も材木を曳々掛け聲かけて引き込む如く、南無阿彌陀佛々々々と、木魚を叩き、念珠つまぐりて、とうど臨終正念までやり通し、終に極樂に引きづり込まるゝ迄やつて行くのだ、といふのが、鎭西上人の流義なのである。て一寸聞くとこの方が如何にも態度が敬虔にして、青年者にはよく思はれる。處が中心に考へて見ると、如何に眞實淸淨の心を起して、一心不亂に念佛して居ても、我等が心は忽ちに散亂する。何れ丈け眞實に行はんとしても、眞に心から眞實に行ふことが出來ぬ。

一一、處が一方の西山派なるものは、今の命に歸へると取る方で、之は幾分悟の氣持ちを持つた安心である、何ういふかと言ふに、十方衆生を救はずんば佛とはならぬと誓はれた佛が、既に正覺を成就し給ひ、念佛が現はれてある上は、はや我等が往生は成就して居るのである、我等は既に救はれて居るのである。それを此方が唯救はれて居ぬと思ふて居るのであるから、此方が氣が附いて、佛の正覺の命に歸つたのが信心であると。之なら極めてらくな信心である。極言すると、我等のこの惡い所が卽ち佛の惠みの中に居る所以だと、佛に歸へればよいのであるから、事やすい。けれども我々現に淺間しき心を持ち、罪の生活を續けて居て、何う押しつけて見ても、之で救はれて居るといふ譯にはゆかぬ。卽ち之は向ふかたの勅命を聞かず、自分で自分に言ふて居るのであるから、安心されやう筈が無いのである。

一二、すると自ら苦心して安んぜられず、自ら安んじて、安ぜられず、その如何とも仕て見やうなき私の惡しさに向つて、その仕て見やうなさの程をば向ふから汲み取つて下された方ありて　その仕て見やうないのが哀はれて捨て置けぬばかりの御眞實から、その者に

何處迄も無我無碍の態度で向つて下さる。卽ち今ていふ無抵抗の態度で來て下さるの故、一念其の思召の忝けなさに氣がつくと、如何な抵抗性の我々も、その御眞實の爲めに此方の抵抗性を取られて仕まひ、思はず知らず鬼のやうな淺間しき奴が、初めて佛の廣大なる勅命に歸し奉ると、なつて來るのである。

一三、それ故前の二は、實は佛が見えて居やせぬ。佛に向ふ此方の態度ばかしになつて居て、向ふの思召は薩張り聞えて居やせぬのである。陛下が今現にこの仕て見やう無き難儀者に、この寶をやらうの思召、之が聞えて居れば決してあたりを淸めてお迎えしやうにはならせぬ。それ故今眞の思召は、その汝の難儀を打あけて言へ〳〵、その汝を何處迄も救ひ度いばかしであるぞとの、この勅命を承はる一つであると。それ故親鸞聖人は、

歸命と言ふは本願招喚の勅命也。（行卷）

こは併し信仰としては、何うしても之でなくてはならぬのである。

勅命を外にして如來の說明は出來ぬ

一四、そこで靑年の諸君は、その言ふ處の如來とは如何本願とは如何、直ぐ玆で之を云はれるのであるけれども、之が說明出來る位ならば、他力といふことは無くなつて仕まふのである。陛下の勅命喚發といへば、卽ちその事によりて大御心の程は表はれて來る。同やうに今現に私共が承はる處の本願招喚の勅命、之を外にして如來といふことも本願といふことも言ふことは出來ぬ。併し唯喚發だとその事柄で頂くのではなくて、その態々喚發して下された親心の御眞實、之を頂くとその一念に『有難う』と、思召の程に徹底するとなつて來るのである。而してその徹底の一念に腹底よりその御眞實一つに滿足せしめられて、卽ち攝取不捨といふことになつて來るのである。

攝取不捨の味ひ

一五、處でこの攝取不捨なる味ひが、極めて間違ひ易い故、よくお聞きを願はねばならぬ。大抵は之を一念に取らず、我々が今日斯うして世界に在られるのが攝取不捨の惠みであると、斯ふいふ風になり易い。それ故動もすると、我々今日斯うして佛の惠みに包まれて居るのだといふ風の言ひ方になつて來る。この包まれて居るが甚だ面白くない。それは眞に救はれた味ひでなくて、寧ろ西山風に近い言ひ方である。

一六、『歎異鈔』のお示には、

彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひ立つ心のおこるとき、攝取不捨の利益にはあづけしめたまふなり。

佛の遣る瀨無き御眞實の屆いて、難有いと一念歸命の立所に攝取不捨は現はれて來る。人生界でも親が子を遣る瀨無く思ふに係はらず、子が親の言ふことが分らぬ〳〵と、少しも有難く思はぬ。處がその分らぬ〳〵と言ふのが彌々可哀相で、益々捨てぬ親の慈悲心に、とうど子供が目が醒めて、『親はそこまで言うて呉れたのであつたか、有難い』と、初めて念佛申さんと思ひ立つ心の起る時、親は何と言はるゝか。『それを知らしたかつたのだ、そうさへ言つて呉れゝば、最早や言ふことは無い。それ聞いて親は汝の喜ぶ幾層倍嬉しいか知れぬぞ』と、この親の方が喜んで下された姿が攝取不捨の御利益なることなのである。故に親鸞聖人は『和讃』に

金剛堅固の信心の　　さだまるときをまちえてぞ

彌陀の心光攝護して　　ながく生死をへだてける

聖人の示され方は如何にも、玆が際立ちてある。十劫正覺の昔より、惠みの中に包まれて居るのが攝取不捨ならば、何も『持ちえてぞ』と仰しやることはないのである。

蓮如上人の『御文』に於ける『後生助け給へと賴む』の意義

一七、そこで話がふかくなりますけれど、蓮如上人の『御文』は之でお書きなされてあるのである。『御文』は八十通、何れ見ても大低同じ御文で、曰く、南無阿彌陀佛の六字を心得たのが信心の姿である。何う心得るかといふに、南無といふは歸命である。歸命といふは阿彌陀佛後生助け給へと賴む心である。その賴む衆生を如來は深く喜びまし〳〵て、八萬四千の光明中に攝取して捨て給はぬのが阿彌陀佛の四字の心であると。之が誰しも南無阿彌陀佛の字の講釋にとれて、分るには分り易いけれども、どうも味ひがとれなくて困る處なのである。處がこは文字の講釋にあらず、眞の御慈悲が聞えると、何うしても阿彌陀佛後生助け給へとならなくてはならぬのである。

一八　これは親鸞聖人にすると、

十方微塵世界の　念佛の衆生をみそなはし、
攝取してすてざれば　阿彌陀と名けたてまつる。

南無阿彌陀佛と、一念佛の御眞實が徹到して、有難やと受けた處が念佛の衆生なのである。その一念の立所に八萬四千の光明中に攝取して捨て給はぬ。嘗つて或方がこの和贊に就き、念佛の衆生とある念佛の二字が邪魔になりて困ると申された。佛ともあるものが、如何に惡しくてもよいが、信ぜな可かぬとあるのには困ると話された。で私、罪惡とあつたら何うかと申上た處が、イヤ夫れなら大に宜しいと申された。併し茲が罪惡とあつては徹底味が無くなつて仕まふのである。故に私は必ず一念を起さなならぬとは言はぬが、併し打てば響くの道理で、結果は必ずそれになつて來なくてはならぬとのことを申度いのである。

一九、故に蓮如上人は茲の意味で『御文』をば御示し下されたのである。之は『御一代記聞書』にも、

聖人の御流はたのむ一念の所肝要なり。故にたのむと云ことをば、代々あそばしをかれさふらへども、委く何とたのめと云ことをしらざりき。然ば、前々住上人の御代に、御文を御作り候て、雜行をすてゝ後生助けたまへと、一心に彌陀をたのめと、あきらかにしらせられ候。然ば御再興の上人にてまします ものなり。

蓮如上人の有難き處は茲にあるのであります。

二〇、處が若い者には、茲の處がどうも取りにくゝて困る處なのである。頼むが此方から命捨てゝ頼むの意味にしか取れなくて困る。又中には『阿彌陀ほとけの御袖にひしとすがりまいらするおもひをなして、後生をたすけたまへとたのみまうす』などいふ著しいものもあるのである。之等は何うしても此方から無理頼みにやるやうにしか取れぬ。が實は皆な今いふ徹底の思ひからお書きなされてあるのである。之れは啻にお書物の上ばかりでなく、蓮如上人の生活の上にそれが現はれて來て居るのである。親鸞聖人の物には、佛恩報謝などいふことはあまり書かれてないが、蓮如上人になると『改悔文』には、

もろ〳〵の雜行雜修自力のこゝろをふりすてゝ、一心に阿彌陀如來、我等が今度の一大事の後生、御たすけさふらへとたのみまうして候。たのむ一念のとき往生は一定、御たすけは治定と存じ、このうへの稱名は、御恩報謝とよろこびまうし候。この御こと はり聽聞まうしわけさふらふこと、御開山聖人御出世の御恩、次第相承の善知識のあさからざる御勸化の御恩と、ありがたく存じ候。このうへは定めおかせらるゝ御掟、一期をかぎりまもりまうすべく候。

思ひ切つて積極的にどしんと書かれてあるのである。

二一、之など大層自力的に書かれたやうに思はれる。何やら信仰の上に、この掟なるものが一つ引つけてあるやう、眞諦門の上に俗諦門がくつつけてあるやうに思はれる。處が爾らず、私共の經驗で言ふならば、我々この廣大の御眞實に値はずば、今頃何うなりて居るか分らぬ者なのである。この世位ひなことでなく、未來永劫何うなるやら分らぬ者であつたのに、この不思議のお救ひにあひまいらせたといふ事、是れ全く佛の大慈悲、御開山聖人御出世の御恩、この御恩に向ひては、我々何うしてもおよそにあるべきでないと、なつて來るのである。故に蓮如上人の斯の類の仰せは、總てあーせよ斯うせよと、我等を縛られた敎では無く、寧ろ信仰の徹底味は、斯くの如き働きとなりて實人生に現はれて來るのであるとの事を御示し下された敎えであることを忘れてはならぬのである。

二二、故に要する所歸命は、命を捨てゝの歸命でもなく、又命に歸るの歸命でもなく、如來招喚の勅命の遣る瀨なき御眞實が私の心に屆いて下された一念に現はれて來る、一念歸命である。故に之をば覺如上人は、『執持鈔』に

善知識のことばのしたに、歸命の一念を發得せば、そのときをもて娑婆のをはり、臨終とおもふべし。とお知らせ下され、又聖人の『正信偈』には

能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃。

と。併しながら之が此方から『有難く思はんならぬ』又『御眞實を頂けば御禮を言はんならぬ』といふのではなくして、頂いた結果は之になつて來るとの事を申したのであることを取違えぬやうに仕て頂かなくてはならぬ。

東派、本派、すゝめ方の長短、

二三、又餘計なことを申すなれども、眞宗中東本願寺の方は、今の一念歸命に力を入れて話す風になつてある。卽ち受け心で話す事になつて居るのである。處が

西本願寺の方は重に選擇本願で說く風になつて居る。それ故東の話は『斯う頂くのだ』『あゝ思ふのだ』と、大層六かしい。その六かしくなつた極が、何れ丈け聞いても御眞實が蔭になつて、得られぬ憾みがある。處が本派になるとそれは無い代り、『この儘のお助けぢや』『惡ひ儘のお救ひである』と、始どそれが一念に夜の明けた所が無い程にとれる位にあるのである。

二四、それ故私の話が、何ちらかといふと本派の方に迎えられる。それは私が餘り一念歸命を言は無いからであるが、而もそこは迎えられて私あまり滿足て無い。私のは『惡いまゝぢや、この儘でぢや』でなく、その惡いが哀はれて何處迄もお見捨て無き御眞實の故に『あゝ難有や』と滿足の受け心が言ひ度くてならぬのである。處が東の人には、近角のはお慈悲ぢや〳〵と、慈悲ばかしで頂きどこが無いとやうに思はれる。それは受け心は徹底の自然の結果て、それいふと却つて御眞實を申すに妨げになるから、私は餘り申さぬことになつてあるからてあるが、併し茲は大切な點故はつきり仕て置かなくてはならぬ。

二五、今我々の問題は、單にこの人生上のこと位ひに止まらず、命終れば永劫に闇黑に趣かなくてはならぬ私を、それをお見捨てなき御眞實の爲に、それが意外にも佛の世界に迎えられて佛と成る、といふこの著しき問題であるのである。それ故之が眞に佛の御眞意に夜が明けたて無い限り、此方の思ひ做しや、解釋のついた位て、安心のされやう筈が無いのてある。それ故極樂は樂むと聞いて參らんと欲ふて居るのては往生は出來ぬ。極樂は眞實報土と申して、このお見捨て無き御眞實より現はれた國土てあるのてある。極樂を願土とあるは、この本願より來た國土なからてあるのてある。それ故その根本たる本願眞實を頂かぬことにはならぬ。而してその本願眞實のお惠みに夜が明けて、初めて私の心に頂かれた處が、一命歸命の徹底となるのである。

二六、而してその徹底の有樣は、『この長々迷ひ隔てゝ居る私を、その隔ての止まぬを哀はれみて、それ程のお心てお向ひ下さるのであつたか、思召の有難や』と、その一念に佛の御眞實を私の心にまる貰ひにする、この外に無い。故に親鸞聖人は、一面『不斷煩惱得涅槃』と、煩惱は止まぬのだとお示し下されたが、併しその

止まぬを哀はれみ給ふ御慈悲を頂けば、他方には『橫超斷四流』と示されて、我々の迷ひは斷絕されて仕まふのだとお知らせ下されてあるのてある。『信卷』には斷と言ふは往相の一心を發起するが故に、生として當に受くべきの生なく、趣として更到るべき趣無し。六趣四生の因亡し、果滅す。故に卽ち頓に三有生死を斷絕す。故に斷と曰ふなり。

卽ち我々迷ひの生綱が切れて仕まふのてある。煩惱は斷ぜられぬけれども、その斷ぜられぬを哀はれみ給ふお慈悲が心に徹する故に、迷ひの根が切れて仕まふのてある。卽ち昔から生花の、煩惱の花は咲けども、大もとの根が切れてあるに喩える所以てある。卽ち人生の煩惱生活の上には、士農工商夫れ〳〵の別あれども皆な一味平等に廣大のお慈悲一つに救はれるとなる所以てあります。

お惠みであることを忘れ給はぬやう

二七、猶ほ最後に一言を加えて置き度い。それは何處迄もお惠みであることを忘れぬやうにといふことてある。私はいつも、我々の隔ての止まぬのを飽く迄隔て給はぬお心て、終に我々の隔てが止むのだとお話致して居る。すると我々の貧しき處へ、その貧しきを捨てぬお救ひと聞く一念に、有難うの次に『もう仕てやつた』とこれになり易い。するとその端的に不思議のお惠みなることは忘れて仕まつて、自分はもう信仰が出來た、俺はもう金持ちになつた、之になつて仕まふのてある。これは我々の方はもとの儘なる貧乏人なれども、このお慈悲頂く故に之ほどに安んずることが出來るやうになつたのてあることを忘れぬやうに仕ておかなくてはならぬ。返す〳〵もお惠みてあることを遺さぬやうにすることが肝腎てあります。

二八、故に昔から、一念に『俺は金持ちになつた、事濟みになつた』となるを一念義の異義といふ。『御文』には、

一念をもてば往生治定の時刻とさだめて、その時の命のぶれば自然と多念に及ぶ道理なり。

不思議の思召に一念夜が明ければ、苦しき度毎に何時もそのお惠みに救はれて、それが後念相續となるのてある。處が又いつ迄も多念で、何處迄いきても徹底の切りのつかぬ有樣てあると、それは多念義の異義となる。

二九、大分くどいことを申したなれども、近頃私は色々なことを心配するやうになつた。從來は信仰の普及せぬ事、卽ち擴がらぬ方を一時心配したことであつたが、近頃は折角御緣あつて聽いて頂きたる人に、何うかお慈悲の眞實の處がとつて貰はれるやうに、何うかお聽き下された處に聞き間違ひの無いやうにと、この方に考が向いて居ることである。之は年よつた精かも知れぬが、又一面眞實の處が行き屆いて居ぬ恐れが大にある。第一屆ける機關たる雜誌さへ出て居ぬ始末で相すまぬことであるが、之は我ながら甚だ年寄り臭きことを申したなれども、何うか只今申述べた處如きも、之を返す〳〵も一念歸命が無ければ可かぬのだと取らずに、無けねば可かぬので無い。廣大の御眞實頂くとひとりでに現はれて來る有樣が、一念歸命であることに思ひ間違ひをなさらぬやうに仕て頂き度い事であります。

（十二月十五日）

信仰書簡

拜啓、日增にお寒くなりますが、皆樣お變りはありませぬか。御母上樣御病氣は、その後いかゞの御樣子で居らせられますか。主人と御噂さは致して居りますが、御尋ねも申上げず、失禮お ゆるし下さいまし。

偖て早速ですが、今日はあなた樣に喜んでいただいたり、又一つにはお願ひ申上度き事があります。どうぞまわらぬ筆ながら、およみ下さいまし。

私事御存じの通り、兼ねてレウマチスにてなやみ居りましたが、七月以來非常に胃が惡くなりました。夫も矢張り服藥の作用で胃をわるくすること〻存じ、醫者より健胃藥などもらひ致して居りましたが、益々やせる計り、（元氣は少しも變りませぬが）食事も漸く一ぜんやつといたゞく位、餘り衰弱致しますので、病院へゆき、見てもらひましたら、胃癌との事、夫れをきゝました時の私の失望、何とも申やうがありませぬでした。八十六の老母、及生母も七十餘の老人をあとに殘し、五人の子供のあと〳〵の始末、主人のこの後の不

自由を思ひまして、實に上氣致さん計りでした。併しどうぞ御安神下さい。この刹那の非常の失望と同時にハツト如來のお慈悲と申す事に心づき、アヽもうなつかしいと申した處で、共に暮らせるものではなし、もう手を引いて下さるあなたに任かせするより行く處はないと心づくと共に、胸もはりさける位ひの切なさがスーッと開けまして、アヽこの病氣が萬一主人であつたらどうであらう、財產はなし、老人子供をかゝへ、病夫をかゝへ、長い間には收入の道も絕え、そのむづたらしさは如何ばかり、アヽ私であつてこんな喜ばしい事はない、是も皆お はからひによる處と、スツカリと元氣も直り、平氣で病院より歸つて參りました。併し歸宅後主人、壽夫、樂子に、右の次第申しました處其のなげきは非常にて、主人は今までの苦勞を氣の毒と申し、子供はわがまゝ計り致して、誠にすまなかつた、ゆるして下さいと申しては泣き、兩三日と申すものは、どうもこうもならぬ程でしたが、信仰のありがたさ、主人もすつかり思ひ直し、この頃では最早や私は死したる者故、一日〳〵と生きのびさせていただいて居る、アヽ有がたい事と喜んで、養生と服藥を怠りなく致して居ります。病院ではこの冬中いかゞと申したのだそうですが、私の立場としては、明日であらうと又半年後であらうと、變りはありませぬが、子供の爲めには、一日でも永く居る方よろしくと、主人も申して居ります。夫れで誠にお忙がしい中、申兼ねた次第ですが、枕もとへ立る二枚折へ、あなた樣の何かおかきになつたものをはり度いと存じ、主人へ申しましたら、お願ひして送つていたゞくやうと申しますから、どうぞ一筆お記し下され、御送り願ひます。今夏鞆で書いて頂いたのは、二つとも掛軸にして、朝夕ありがたく拜見致して居ります。生前今一度御目もじ致し、親しくお物語り致したいのですが、何を申すも遠方の事幾十年の後には、又親しくお目にかゝれる事と、樂しんで居ります。不時の死と申す事も世間には多いのに、かくも夫婦親子心のかぎり名殘りを惜しむ事が出來、又心の底から打とけて、あなたのおじひを喜ばせていたゞく事の出來ると申すことは、何たる幸ひと、主人とも喜んで、其日〳〵を愉快に元氣に暮して居ります。どうぞ奧樣にもよしなにお傳へ下さるやう偏にねんじ上げます。どうぞ〳〵死後の處、何分〳〵よし

なに願ひ上げます。早々。

十一月二十六日　池山清

近角様

○

拝啓仕候。愈御清安奉欣賀候。陳者ありうべきことをありうべしとしらず、或は少くとも、しかしらざるにはあらねども、さることのきのふけふにおこるべしとは、ゆめおもはざりし事の、突如實現して、今更ながら苦惱の娑婆と驚かれぬる煩惱の所爲こそ、あはれにはかなきものにさふらへ。さるにても百雷落ちかゝりぬとおぼえし火宅無常の中に、忽然たゞ念佛の一道を決定し得て、衆禍の波速に轉じ、有がたき菩提の岸歴かに、こゝに夢のうちのちぎりを終へて、さとりの前の緣を結び候事、何たる廣大の恩德に候や。爾來信仰的家庭、信仰的生活の上に、嘗ては單に想像にとゞまりし事ども、着々事實として自覺經驗するを得候こと、偏に攝護心光のお計らひのいたすところと、感佩罷在りさふらふものから、尙依然として常に恩愛のひくところとなり、入數の喜びをしておろそかならしむることこそ、かへすゞ〳〵も無慚無愧のこの身にてはさふらへ。たゞ〳〵南無阿彌陀佛と申すほか別の途無之候。

先日は愚妻より御願ひ申候書きもの玉はり、難有存候。來春は一度御來岡願ひ度き存念に候。御都合よき折も候はゞ、御一報玉はり度候。奥様よりもありがたき御手紙いたゞき、添く存候。宜敷御鳳聲玉はり度候、荆妻の容態目下さしたる異變無之候。謹言。

大正六年十二月十九日　榮吉

近角盟兄　坐下

人生眞實の淵源

『利他圓滿の大行』

近角常觀

近時人生問題の傾向を察するに、極端にまで行き詰つて居ることを認むる次第である。之を過去に比較するに、日露戰爭後に於て、人生問題が行き詰つた已後の現象である。爾るにその當時に於てはその結果、信仰問題が非常に勃興して、所謂見神見佛の實驗等の叫びが大に盛であつた、爾るに今回は前回の時の如く未だ信仰問題の勃興をも認めず、却て宗教に背馳して、世間的欲望、物質的成功に趨るが如き傾向である。之れ甚だ憂心すべき現象である。

倩この兩者の區別を觀察するに、前回は日露戰爭の悲慘に遇ひて、人々親に分れ子に分れ、生命も財産も何の役にも立たぬといふ消極的極所に陷るが故に、必然の結果として、茲に信仰的救濟によりて、復活するより外に道が無つたのである、爾るに今回は人生問題の行き詰つて居ることは、確に前回に劣らぬ程極所に達して居れども、人心の趨勢が前回の時に比するに、正反對である。即ち現時歐洲戰爭の影響として、正貨は我が國に流入し、輸出品は如何なる物もはけざるは無く、物質的欲望、投機的成功等その暴威を逞くし、人々皆な血眼になりて狂奔し、欲望奢移至らざる無き有樣である。それ故人々口を開けば成功を叫び、ねらふ處は世間的快樂である。故に宗教的救濟を聽いても空想の如く考えられ、消極的氣休めの如く受取られて、人生そのものゝ上に、積極的威力を感ぜぬのである。これ現代に於て宗教に遠ざかる一大原因であると考えられるのである。

近頃世上に流行しつゝある一種の宗教的傾向がある。こは眞面目な意味に於て宗教とは名けられぬ。寧ろ迷信と呼んで然るべきものである。然れども世の智識階級とも呼ばるべきものが、滔々として之に趣くの傾きがある。その一種の宗教といふは、或は天啓を下して人の運命を豫言するとか、或は神秘なる方法によりて病氣を直すとか、或は商業的成功を豫言するとか、といふが如き殆ど常識を以て信ず可らざることを信じて居るものが多い。而も世の實業家とか文士とか學者とかいふ者が、滔々として之に趣きつゝあるといふことは、頗る注意を拂ふ可き現象である。是れ一面より言へば、世人が道理とか、常識とか、醫藥とか、いふものに滿足せずして、より以上のものを求むる傾向を示すものといふことを得れども、その根本の動機が、成功とか運命とか病氣全快とか損德とかいふ如き、頗る物質的世間的結果を狙ふて居る處を以て見れば、決して眞正なる意味の宗教では無い、畢竟現代人心の弱點に應じて現はれ來りたる迷信たることを斷言するに憚らない次第である。

爾らば眞正なる宗教とは如何なるものであるか。先づ第一に注意すべき點は、前に擧ぐるが如き世間的物質的結果を目當てとせぬことである否な、吾人人生としては、何人と雖世間的物質的欲望を持たざるものはない。爾れども實際に於て之等の欲望が絶對に滿足することの無いことは事實にして、よしんば假令成功を滿足すと雖も、畢竟これ一種の虚假不實の現象にして、「顚倒の善果」と名く可きものである。若し一日之等の善果に耽溺する時は、一日迷ひを長からしむるものである。故に之等世間的物質的欲望に對しては、絶對的否認を與へねばならぬ。即ち人生の何物も虚假不實である、可壞無常であるといふことを斷言せねばならぬ。蓋しこの事は現代に向つては頗る逆流的の警告である。日露戰爭後の當時の如きは、何れも個人的にこの事實を經驗せしめられたのである、それ故當時は一般として信仰に入り易かつたのである。爾るに現代は、一般としては、皆な成功を叫び、快樂かねらふて居るものである。故に一應二應の警告を爲しても、現代の人心に對しては馬耳東風である。故に現時に於て信仰に入らんとするには、實際事實的に一大雲雷に遭遇し、この虚假無常なることを見せしめらるゝ迄は、目は醒めないのである。現に日本國民の如きも、西洋戰爭の影響に醉はされて、一時的安逸を貪りつゝあるが、他日一大雲雷の霹天を粉碎するものあるか覺悟すべきである。

さて斯くの如く人生の何物も頼む可らざること、又何等の意味のなきことを極言することは、徒に消極的言辭を弄し、悲觀的思想を鼓吹する爲めては無い。その以上に一大積極的救濟、永久的生命の顯現し來ることを告知せんためである。併しながらこの積極的生命、救濟的光明なるものは、決してこの方より積極的に攫みうるものでは無い。若しこの方より進みて積極的に攫むものならば、假ひ言葉は宗教的であらうとも、世間的物質的積極と何の選ぶ處も無いのである。世の中の人が、信仰を得たらば強くなれるであらう、安心を得たらば苦しまぬやうなるであらうと、初めより信仰の結果を臆想して、信仰に入らんとするものは、世間的成功を狙ふと何の異なる處も無い。『極樂は樂むと聞いて登らんと思ふ者は佛になり候はず』といふが實に之である。斯の如く信仰の積極的態度なるものは、初めより積極的希望を持つて滿たさるゝものでは無い。寧ろ前に擧げたる人生的消極虚假不實に對する眞實同情の大慈大悲である。

抑も眞實といふは、如何なることであるか。世俗に眞實といふことは、正直なることである、嘘言はぬことであると考へられるのである。爾れども是れ未だ眞實の要髓を得たるものでは無い。抑眞實といふことは、世の不實に對して飽く迄變はらず、飽く迄見捨てぬものが眞實である。言葉を換へて之を言へば、如何なる不實を以て刄向ふとも、如何なる虚僞を以て交るも、絶對眞實なるものはこの反對の爲にその眞實を變ゆること無く、その虚僞を以て眞實を傷ることは出來ぬのである。『本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なき故に、惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきが故に』、卽ち人生の如何なる罪惡を以て向ふも、如何なる虚僞を以て交るも、一歩一厘如來の眞實を妨ることが出來ないのである。言葉を換へて之を言へば、我等が如何なる不實を以て向ふも虚僞を以て向ふも、如來の同情を減殺することは出來ぬのである。卽ち如來の眞實は人間の罪惡のあらん限り飽く迄之を見捨てざる眞實である。如來の清淨は濁惡の我等を飽く迄清むる處の源泉である。斯くの如き如來眞實の源泉を名けて、淨土眞實の行、卽ち他力大行の南無阿彌陀佛といふのである。是れ實に他力淨信の淵源にして、利他圓滿の大行卽ち是てある。而して親鸞聖人『敎行信證』行卷一部に於て、この大行を闡明せられたのである。

行卷劈頭に言く『謹て往相の廻向を按ずるに、大行有り、大信有り、大行は則無碍光如來の名を稱するなり。斯の行は卽是れ諸の善法を攝し、諸の德本を具せり。極速圓滿す、眞如一實の功德寶海なり。故に大行

と名く。』抑この如來の本願力廻向といふことが、我等濁惡不實の者に向つて、如來の清淨眞實の親心の顯現である。『無明の大夜をあはれみて、法身の光輪きはもなく、無碍光佛としめしてぞ、安養界に影現する』實に本覺明了たる一如法界の佛境界より、凡愚底下の無明闇黑の我等を觀そなはす時は、我等が、醉へる丈けそれ丈けこれを矜み給ひ、眠れる丈けそれ丈け之を憐愍し給ふが、卽ち選擇本願の親心である。その選擇本願の親心の儘を顯現したるものが、南無阿彌陀佛である。聖人が卽是其行といふは選擇本願是なりと言はれたるのが、願心卽ち大行たることを闡明せられたのである。而してこの南無阿彌陀佛の六字は、その名に顯示されたる意義があるのである。故に我等が南無阿彌陀佛を稱へて、如來を讃歎する時は、徒に聲に出して稱ふるばかりては無い。彼の如來の光明智相の如く彼の名義の如く、實の如く修行し相應せねばならぬ。卽ち單に無碍光如來のみ名を稱ふるばかりては無い。その無碍光佛の意義を信知し、又無碍光佛の光明に接觸して、その如來の眞實を實驗することである。故に如實修行相應といふは、如來は是れ實相身なり、爲物身なりと知るなりと釋せられてある。是れ卽ち實相一如の境界より顯現して、五濁凡愚の我等がために現はれ給ひし清淨眞實の如來にてましますことを心に實驗し、頂くことである。『聖人の常の仰せには、彌陀の五刼思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそこばくの業をもちける身にてありけるを、助けんとおぼしめし立ちける本願の忝けなさよ』と、述懷せられたるは、實に聖人が如來はこれ實相身なり、爲物身なりと知られたのである。之が所謂如實修行相應である。一度びこの如來の親心を頂けば、忽ち茲に破闇滿願の德を與へらるゝのである。强いて言へば破闇といふは人生の消極的方面に向つての如來眞實の同情である、滿願といふはその同情を以て、飽く迄人生の悲哀を和げ、その眞實を以て人生の不實不淨を轉じて圓滿充實の結果を持ち來さるゝのである。斯の如き如來清淨眞實の淵源である故に、上記行卷の文に、『斯の行は卽是れ諸の善法を攝し、諸の德本を具せり、極速圓滿す、眞如一實の功德寶海なり、故に大行と名く』と言はれたる所以である。

『五濁惡世の有情の、選擇本願信ずれば、不可稱不可

說不可思議の、功德は行者の身にみてり』これ實に、五濁惡世の我等が心に、如來の選擇願心の徹底したる有樣である。抑〻如來の選擇願心は、何れの行も及びがたき我等を哀れみ給ひて、飽く迄見捨て給はぬ唯念佛の一行である。全體選擇本願といふ言葉の中には、前に記せる消極積極の兩面を具へてある。法然聖人『選擇集』に、何故如來は念佛の一行を選擇したるかといふに就て、二義を擧げてある。一つは勝劣の義、二つには難易の義である。是れ一見せば頗る法門沙汰のやうに考えらるゝも、深くその意義を味へば、信仰の實驗に於ける積極消極の兩面を現はせるものである。先づ難易の義といふは、諸行は難く念佛は易し。若し起立塔像を以て往生の行となさば、貧窮困乏の類往生の望みを絶たん。若し持戒持律を以て往生の行となさば、破戒無戒の者は往生の望みを絶たん。若し智慧高才を以て行となさば、愚癡無智の者は往生の望を絶たん。茲に於て如來の願意、貧窮困乏、破戒無戒の者の爲めに、持ち易く稱へ易き念佛の一行を選び取りたりといふ。是れ如來が有りと有ゆる我等の消極的方面を觀そなはして、見捨て給はぬ一面を現はしたるものである。而してその消極的方面を飽く迄補ひ、飽く迄滿たしめ、終に滿足せしめずば止まぬといふが、卽ち信仰の積極的方面である。之を闡明したるが卽ち勝劣の義である。勝劣の義といふは、諸行は功德ありと雖絶對に無い、一部分に過ぎぬのである。所謂小善根小福德因緣である。又我々が實行の上より考えて見ても、戒律と言ひ智慧高才と言ひ、我々は絶對に實行することは出來ぬのである。爾るに念佛の一行は、諸の善法を攝し、諸の德本を具へ、上に擧ぐる破戒無戒愚癡無智なるものを飽く迄見捨てぬ大慈大悲の大善大功德の、圓滿具足したる積極的同情の眞實の力である。五濁惡世の我等一度びこの大慈大悲の力に遭ひ奉れば、忽にして衷心滿足せしめらるゝのである。度び〳〵繰返す譬喩の如く、我等は眞言止觀の果實を拾ふ能はず、持戒坐禪の堅きものを食する能はざる大病人である。是卽ち消極的方面である。大病人を哀れみて之が爲めに態々作り給ひたのが、南無阿彌陀佛のお粥である。この粥は斯の如き重態の病人に食し易いやうに作られたのみならず、その粥の中には滋養分もあれば諸の味ひもあり、有らゆる功德の充ち滿ちたる絶對の惠みなれば、如何なる病氣も如何なる衰弱も忽にして癒さるゝのである。

『本願力にあひぬれば、空しくすぐる人ぞなき、功德の寶海みち〳〵て、煩惱の濁水へだてなし』とあるが、實にこの積極的充實の眞味を歎ぜられたものである。之が人生上に實現されたのが、卽ち信仰的生活である、心多歡喜の益である、心光攝護の益である。是れ實に本願招喚の勅命に徹底せられたる一念歸命の法悅慶喜の人生を實現し來るのである。現代の物質的世間的欲望の人生を一轉して、この充實滿足の生活を持ち來すことが、國家緊急の問題である。

■　■　■

長い間休刊を續けて、何とも申譯けがありませぬ。その間も絶對發刊の考てはなく、時來り次第續續刊行の心積で居りましたものですから、皆樣にキツパリお斷りも申上げず、爲に種々御心配やら御手數をかけたことを謹みて御詫び致します。今度漸く御覽の如きの形で、再び讀んで頂くことになりました。出來上つて見ると、全誌殆ど同一文字で、雜誌としては甚だ氣の變はらぬ行き方で、御讀み下さるに嘸お骨の折れることゝ思ひますが、信仰のことゝしては、只今の處他に變つた適切な表ばし方もなく、又相變らずの面面目で、御目にかゝることゝなりました。併し信仰問題としては、我等の注意を向ければならぬ要點の處は、廻はりくどき文字の中にも出來るだけは盡してあります積りですから、幸に仔細に御覽下さるやうお願ひ致します。猶ほ及ばぬながらも、皆樣がお慈悲をお聽き下さる上に、雜誌として勉められる丈けは、今後に於て微力を致させて貰ひ度いと思ひますから、果して滿足して頂けるやう出來るか何うかは分りませぬが、そのお含みで御不審等の點もありましたら、發行所宛て御申越し下されたら、成る丈けそれらの事柄も誌上に於て明になるやうに仕てゆき度いとは考えます。何ないふても力の乏しいと、手不足の間から出してゆきますので、種々不届きな事ばかり、何卒御諒察下され、御見許し下さるやう、御願ひ致します。

何分長い間休みましたので、その間讀者諸賢の間には御住所の移動等その他當所の手落等から、今回は種々なる間違ひも尠くなからうと案じて居ります。何卒それらの點に就きても御心づきのことは、御手數ながらどなた樣からにても御遠慮なく御申越し下さるやう御願致し度う存じます。又體裁もこんな風に改めましたが、これも紙價暴騰の今日從前の定價を維持仕度い考から、出來る丈け簡素な形をとつたのでありますから合せて御了承を願上げます。（發行所）

求道叢誌四卷第壹號大正七年三月八日第三種郵便物認可
大正七年三月六日發行（毎月一回一日發行）

近角常觀著

信仰之餘瀝

第三版　定價十錢　改正卅五錢　郵税四錢

右久しく品切れの處昨年中に出來致しました。

懺悔錄

第十版　定價廿五錢　改正廿五錢　郵税貳錢

信仰問題

第四版　定價七十五錢　改正七十五錢　郵税六錢

歎異鈔

第七版　定價五錢　郵税三冊迄貳錢

信仰之余瀝要略

四版　定價五錢　郵税三冊迄貳錢

この要略は『信仰之余瀝』中の主要なる數篇を選び、『歎異鈔』と共に、御施本用としてこしらえました。御求めの部數に應じ割引を致します

東京市本郷區森川町一
振替口座東京一六六九六番　求道發行所

講話

毎日曜午前九時
毎土曜午後六時　求道會館（本郷區森川町一番地）

毎土曜午後二時　第二求道會（九段坂佛教倶樂部）

毎月二十七日午後七時　第三求道會（日本橋綱町説教所）

毎日曜午前八時　日曜學校（求道會館）

●本誌は毎月一回一日發行とす●誌代は總て前金御拂込みのこと●送金は成るべく振替によられたし●郵便爲替の場合には振替局は本郷區森川町局宛のこと●郵券代用は一割増●宛名人は凡て求道發行所のこと

定價一部十四錢（六ケ月分八十錢　十二ケ月分壹圓五十錢）（郵税不要）

大正七年二月二十五日印刷
大正七年三月　六日發行

發行人　近角常觀
編輯人　近角常音
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

發行所　求道發行所
電話（小石川一六四一番）振替（東京一六六九六番）